



E-ASIA
university of oregon libraries

<http://e-asia.uoregon.edu>

歌行燈

泉鏡花

底本：「泉鏡花集成 6」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成 8）年 3 月 21 日第 1 刷発行

歌行燈

泉鏡花

—

みやしげ
宮 重 大根のふとしく立てし宮柱は、ふろふきの熱田の神のみそなわす、七里の

なみ よろこ
わたし 浪 ゆたかにして、来往の渡船難なく桑名につきたる 悦 びのあまり……

くちずさ ひとりごと ひざくりげ
と口 誦 むように 独 言 の、膝 栗 毛 五編の上の読初め、霜月十日あまりの初

なかぞら さえき みずごり つきあかり
夜。中 空 は 冴 切 っ っ っ、星が水垢離取りそうな 月 明 に、踏切の棧橋を渡る

ともしび おちこち こだち なが
影高く、 灯 ちらちらと目の下に、遠 近 の 樹 立 の 骨 ば かり なの を 視 め ながら、

ステエション
桑名の 停 車 場 へ 下 り た 旅 客 が 有 る。

ふさわ まっくる がいとう や からだ
月の影には相 応 しい、真 黒 な 外 套 の、瘦 せ た 身 体 に ち と 広 過 ぎ る を 緩 く 着

て、焦茶色の中折帽、真新しいはさて可いが、馴れない天窓に山を立てて、 鐙 を

かぶ は とめひも
しっかりと耳へ 被 さるばかり深く嵌めた、あまつさえ、風にとられまいための 留 紐

しな ぐあい ときよ の
を、ぶらりと 皺 び た 頬 へ 下 げ た 工 合 が、時 世 な れ ば、道 中、笠 も 載 せ ら れ ず、と

あきら やじろべえ
断 念 め た 風 に 見 え る。年 配 六 十 二 三 の、気 ば かり 若 い 弥 次 郎 兵 衛。

さまで重荷ではないそうで、唐草模様の天鵝絨の革靴に信玄袋を引揃めて、

こいつを片手。片手に蝙蝠傘を支きながら、

「さて……悦びのあまり名物の焼蛤に酒汲みかわして、……と本文にあ

るところ、はたごやちゃく、の前に、停車場前の茶店か何かで、一本傾けて参ろうか

な。(どうだ、喜多八。)と行きたいが、其許は年上で、ちとそりが合わぬ。だがね、

家元の弥次郎兵衛どの事も、伊勢路では、これ、同伴の喜多八にはぐれて、一人旅
のとぼとぼと、棚からぶら下った宿屋を尋ねめぐんで、泣きそうになったとあるです。と

ころで其許は、道中松並木で出来た道づれの格だ。その道づれと、何んと一口遣ろう

ではないか、ええ、捻平さん。」

「また、言うわ。」

と苦い顔を渋くした、同伴の老人は、まだ、その上を四つ五つで、やがて七十年

るべし。臘虎皮の鰐なし古帽子を、白い眉尖深々と被って、鼠の羅紗の

みちゆき、ももひき、せったばき、あ、うこん、
道行着た、股引を太く白足袋の雪駄穿。色褪せた鬱金の風呂敷、

まんなか、ゆわ、さいぎょうじょい、
真中を紐で結えた包を、西行背負に胸で結んで、これも信玄袋を手に一

つ。片手に杖は支いたけれども、足腰はしゃんとした、人柄の可いお爺様。

「その捻平は止しにさっしやい、人聞きが悪うてならん。道づれは可けれども、道中松

並木で出来たと言うで、何とやら、その、私が護摩の灰でもあるように聞えるじ

や。」と杖を一つとんと支くと、後の雁が前になって、改札口を早々と出る。

わざと一足^{うしろ}後へ開いて、隠居が意見に急ぐような、連^{つれ}の後姿をじろりと見ながら、

「それ、そこがそれ捻平さね。松並木で出来たと云って、何もごまのはいには限るまい。もっとも若い内は遣ったかも知れんてな。ははは、」

人も無げに笑う手から、引手繰る^{ひったく}ように切符を取られて、はっと馱夫の顔を見て、きまじめ^{きまじめ}よとんと生真面目。

成程、この小父^{おじご}者が改札口を出た^{しんがり}殿で、何をふらふら道草したか、汽車はもう遠くの方で、名物焼蛤の白い煙を、夢のように月下に吐いて、真^{まっさお}蒼な野路を光って通る。……

「やがてここを立^{たちい}出^{たど}で^ゆ辿り行くほどに、旅人の唄を聞けば、」

と小父者、出た処で、けろりとしてまた口^{くちずさ}誦んで、

「捻平さん、可^いい文句だ、これさ。……」

しぐれはまぐり
時^し雨^{あめ}蛤^{かき}みやげにさんせ

みや
宮のおかめが、……ヤレコリヤ、よオしよし。」

だんな
「旦那、お供はどうで、」

ステーション
と停車場前の夜の隈^{くま}に、四五台朦朧^{もうろう}と寂しく並んだ車の中から、車夫が一人、腕組みをして、のっそり出る。

これを聞くと弥次郎兵衛、口を捻^ねじて片^{かた}頬^{ほえ}笑み、

ありがて
「有^あ難^がえ、凶星という処へ出て来たぜ。が、同じ事を、これ、(旦那衆戻り馬乗らん

せんか、)となぜ言わぬ。」

「へい、」と言ったが、車夫は変哲もない ^{がんしょく}顔 色 で、そのまま棒立。

二

おじご
小父者は外套の袖をふらふらと、酔ったような ^{ふうつき}風 附 で、

や
「遣れよ、さあ、(戻馬乗らんせんか、)と、^{ごしょう}後 生 だから一つ気取ってくれ。」

「へい、(戻馬乗らんせんか、)と言うでございますかね、戻馬乗らんせんか。」

と早口で車夫は ^{じつてい}実 体 。

「はははは、^{ほうしょうじのにゆうどうさき}法 性 寺 入 道 前 の ^{かんぱくだじょうだいじん}関 白 太 政 大 臣 と言ったら腹を立ちやった、法性寺入道前の関白太政大臣様と来ている。」とまたアハハと笑う。

「さあ、もし召して下さい。」

と話は ^{きま}極 った ^{はず}筈 にして、委細構わず、車夫は ^{とつつ}取 着 いて ^{かじぼう}梶 棒 を差向ける。

小父者、目を据えてわざと見て、

「ヤレコリヤ車なんぞ、よオしよし。」

「いや、よしではない。」

とそこに一人つくねんと、^{そえだけ}添 竹 に、その ^{かれぎく}枯 菊 の ^{すが}縫 った、^{おきな}霜 の 翁 は、旅のあわれを、月空に知った姿で、

「早く車を雇わっしゃれ。手荷物はあり、勝手知れぬ町の中を、何を ^{あて}当 にぶらつこう

で。」と口叱言で半ば ^{くちごと} づば ^{つばや} 眩 く。

「いや、まず一つ、(よヲしよし、)と切出さんと、本文に合わぬてさ。処へ喜多八が口を

出して、(しょうろく四^{しもん}錢で乗るべいか。)馬^{うま}士^{かた}が、(そんなら、ようせよせ。)と言

やす、馬がヒインヒインと嘶^{いば}う。」

「若いもの、その人に構うまい。車を早く。川口の湊^{みなと}屋^やと言う旅籠屋^{はたご}へ行くのじや。」

「ええ、二台でござりますね。」

「何んでも構わぬ、私^{わし}は急ぐに……」と後^{うしろ}向^むきに掴^{つか}まって、乗った雪駄^{つまだ}を爪立

てながら、蹴込み^{けこ}へ入れた革鞆^{また}を跨^{また}ぎ、首に掛けた風呂敷包みを外ずしもしないで

ゆす
揺^ゆっておく。

「いちれんたくしょう
一^い蓮^{れん}託^{たく}生^{しょう}、死なば諸共、捻平待ちやれ。」と、くすくす笑って、小父者も車に
しゃんと乗る。……

「湊屋だえ、」

「おいよ。」

で、二台、月に提^{かんぱん}灯^{あかり}の灯^{ひろ}黄色^{つぱ}に、広^{かけ}場^この端へ駆^か込むと……

いしたかみち
石^い高^{した}路^{かみち}をがたがたしながら、板塀の小路、土塀の辻、径^{ちかみち}路^{ちかみち}を縫うと見えて、

寂しい処幾曲り。やがて二階屋が建続き、町幅が糸のよう、月の光を^{ひさし} 廂^{おお}で覆^おう

て、両側の暗い軒に、掛^{かけ}行^{あん}燈^{どん}が疎^{まばら}に白く、枯柳に星が乱れて、壁の蒼^{あお}い

のが処々。長い通りの突当りには、火の見の階^{はしご}子^とが、遠^{とお}山^{やま}の霧を破って、

はんしょう
半^い鐘^{しょう}の形活けるがごとし。……火の用心さっさりやしょう、金^{かな}棒^{ぼう}の音に夜更

けの景色。霜枯時の事ながら、月は格子にあるものを、桑名^この妓達は宵寝と見える、

くるわ さしかか
寂しい新地へ 差 掛った。

やぼね
輻 の下に流るる道は、細き水銀の川のごとく、柱の黒い家の 状、あたかも
かわうそ まつり しらはり じぐちあんどん
瀬 が祭礼をして、白 張 の地 口 行 燈 を掛連ねた、鉄橋を渡るようである。

爺様の乗った前の車が、はたと 留 った。

あれ聞け…… ひっそり ひとすじくるわ むねがわら わだち
寂 寞とした 一 条 廓 の、棟 瓦 にも響き転げる、 轍
の音も留まるばかり、 灘 の浪を川に寄せて、千里の 果 も同じ水に、筑前の沖の月
影を、しろがね きら
白 銀 の糸で手繰ったように、星に 晃 めく唄の声。

はかたおび ちくぜんしぼり
博 多 帯しめ、筑 前 絞、

田舎の人とは思われぬ、

ある
歩行く姿が、柳町、

と博多節を流している。……つい目の 前 の軒陰に。……白地の 手 拭、

ほおかむり やせ べに
類 被、すらりと 瘦 ぎすな男の姿の、軒のその、うどんと 紅 で書いた看板の

前に、横顔ながら 俯 向いて、ただ影法師のように 伊 むのがあった。

捻平はフト車の上から、 うなじ うしろ
頸 の風呂敷包のまま振向いて、何か 背後へ声を掛けた。

……と同時に弥次郎兵衛の車も、ちょうどその唄う声を、町の中で 引 挟 んで、がっ

きと留まった。が、話の意味は通ぜずに、そのまま捻平のがまた 曳 出す…… 後 の

車も続いて 駈 け出す。と二台がちょっと摺れ摺れになって、すぐ 旧 の通り 前 後に、

流るるような月夜の車。

三

お月様がちよいと出て松の影、

アラ、ドッコイショ、

と沖の浪の月の中へ、颯と、撥を投げたように、霜を切って、唄い棄てた。……

うどんや かど 鮎 屋の 門 に博多節を弾いたのは、転進をやや縦に、三味線の手を緩める

と、撥を逆手に、その柄で弾くようにして、仄のりと、薄赤い、其屋の板障子をす
らりと開けた。

「ご免なさいよ。」

ほおかむ すず 頬 被りの中の 清しい目が、釜から吹出す湯気の裏へすっきりと、出たの

を一目、驚いた顔をしたのは、帳場の端に土間を跨いで、腰掛けながら、うっかり

ききと 聞惚れていた亭主で、紺の筒袖にめくら縞の前垂がけ、草色の股引で、尻

なり からの形、によいと立って、

「出ないぜえ。」

は、ずるいな。……案ずるに我が家の門附を聞徳に、いざ、その段になった

処で、くだん 件の(出ないぜ。)を極めてこまそ心積りを、唐突に頬被を突込まれて、

うろた 大分狼狽えたものらしい。もっとも居合わせた客はなかった。

門附は、澄まして、背後じめに戸を閉てながら、三味線を斜にずっと入って、

「あい、親方は出ずとも可いのさ。私の方で入るのだから。……ねえ、女房さん、そ
んなものじゃありませんかね。」

とちと笑声が交って聞えた。

女房は、これも現下の博多節に、うっかり気を取られて、釜前の湯気に^{もう}朦として立
っていた。……^{いま}浅葱の^{たすき}襷、白い腕を、部厚な釜の^{ふた}蓋にちよつと載せたが、
^{まるまげ}丸鬘をがっくりさした、色の白い、^{ちゅうどしま}齒を染めた中年増。この途端に^{さっ}颯と
^{まぶた}瞼を赤うしたが、^{へっつい}籠の前を横ツちよに、かたかたと下駄の音で、亭主の膝を
^{はすっか}斜交いに、^{ぜにばこ}帳場の銭箱へがっちりと手を入れる。

「ああ、御心配には及びません。」

と門附は物優しく、

^{じょうだん}「串戯だ、^{ゆする}強請んじゃありません。こつちが客だよ、客なんですよ。」

細長い土間の一方は、薄汚れた縦に六畳ばかりの市松畳、そこへ上れば坐れるの
を、釜に近い、^{しょうぎい}床几の上に、ト足を伸ばして、

「どうもね、寒くて^{たま}堪らないから、一杯^{ごちそう}御馳走になろうと思って。ええ、親方、決してその御迷惑を掛けるもんじゃありません。」

^{おとな}で、優柔しく頬被りを取った顔を、と見ると迷惑どころかい、目鼻立ちのきりりとした、
^{ほそおもて}細面の、^{まぶた}瞼に^{やつれ}囊は見えるけれども、目の清らかな、眉の濃い、二十八
^{ひとがら}九の^{あにい}人品な兄哥である。

「へへへへ、いや、どうもな、」

と亭主は前へ出て、^{もみで}揉手をしながら、

「しかし、このお天気続きで、まず結構でござりやすよ。」と何も^{すす}ない、煤けた天井を

仰ぎ仰ぎ、帳場の上の神棚へ目を外らす。

「お師匠さん、」

女房前垂をちよつと撫でて、

「お銚子でございますかい。」と莞爾する。

門附は手拭の上へ撥を置いて、腰へ三味線を小取りまわし、うちわの内端に片膝を上げ

ながら、床几の上に素足の胡坐。

すそ褌を一つ掻込んで、

「早速一合、酒は良いのを。」

「ええ、もう飛切りのをおつけ申しますよ。」と女房は土間を横歩行き。左側の畳に据

えた火鉢の中を、邪陰に火箸で掻い掘って、赫と赤くなった処を、床几の門附へずいと寄せ、

「さあ、まあ、お当りなさりました。」

ありがて
「難有え、」

てっかつまひっぱさ
と鉄拐に褌へ引挟んで、ほうと呼吸を一つ長く吐いた。

「世の中にや、こんな炭火があると思うと、里心が付いてなお寒い。堪らねえ。

おかみ
女房さん、銚子をどうかね、ヤケという熱爛にしておくんなさい。ちっと飲んで、うんと酔おうという、卑劣な癖が付いてるんだ、お察しものですが、ええ、親方。」

「へへへ、お方、それ極熱じゃ。」

女房は染めた前歯を美しく、

「あいあい。」

四

「時に何かね、今此家の前を車が二台、旅の人を乗せて駈 抜 けたっけ、この町を、
……」

と干した猪口で 門 を指して、

「二三町行った処で、左側の、屋根の大きそうな家へ着けたのが、蒼 月 明りに見え
たがね、……あすこは何かい、旅籠屋ですか。」

「湊屋 ございませ、なあ、」と女房が、釜の前から亭主を見向く。

「湊屋、湊屋、湊屋。この土地じゃ、まああすこ一軒でござりますよ。古い家じゃが

名代で。前には大きな女郎屋じゃったのが、旅籠屋になったがな、部屋々々も昔

風そのままな家じゃに、奥座敷の欄干の外が、海と一所の、大い揖斐の

川口じゃ。白帆の船も通りますわ。鱸は兎ねる、鮪は飛ぶ。とんと類のない

趣のある家じゃ。ところが、時々崖裏の石垣から、獺が這込んで、板廊

下や 厠 に点いた 燈 を消して、悪戯をするげに言います。が、別に

可 恐い化方はしませぬで。こんな月の良い晩には、庭で 鉢 叩きをして見せる。

……時雨れた夜さは、天保 銭 一つ使賃で、豆腐を買いに行くと言う。それも旅

の衆の 愛 嬌 じゃ言うて、豪い評判の好い旅籠屋ですがな、……お前様、この
土地はまだ何も知りなさらんかい。」

「あい、昨夜初めてこっちへ流込んで来たばかりさ。一向方角も何も分らない。月夜

も闇の烏さね。」

と俯向いて、一口。

「どれ延びない内、底を一つ温めよう、遣ったり！ ほっ、」

と言って、目を擦って面を背けた。

「利く、利く。……恐い利く唐辛子だ。こう、親方の前だがね、ついこないだもこの手

を食ったよ、料簡が悪いのさ。何、上方筋の唐辛子だ、鬼灯の皮が精々だろ

う。利くものか、と高を括って、お銭は要らない薬味なり、どしこと井へぶちまけて、

松坂で飛上った。……また遣ったさ、色気は無えね、涙と涎が一時だ。」と手

の甲で引擦る。

女房が銚子のかわり目を、ト掌で爛を当った。

「お師匠さん、あんたは東の方ですなあ。」

「そうさ、生は東だが、身上は北山さね。」と言う時、徳利の底を振って、

たらたらちよく垂々と猪口へしたむ。

「で、お前様、湊屋へ泊んなさろうと言うのかな。」

それだ、と門口で断りよう、と亭主はその段含ませたそうな気の可い顔色。

「御串戯もんですぜ、泊りは木賃と極っています。莫産と笠と草鞋が留守

居。壁の破れた処から、鼠が首を長くして、私の帰るのを待っている。四五日はこの

桑名へ御厄介になろうと思う。……上旅籠の湊屋で泊めてくれそうな御人品なら、

御当家へ、一夜の御無心申したいね、どんなもんです、女房^{おかみ}さん。」

「こんなでよくば、泊めますわ。」

と身軽に銚子を運んで寄る。と亭主驚いた眉を動かし、

「滅相な。」と帳場を背負って、立^{しよ}塞^{たちふさ}がる^{てい}体^{てい}に腰を掛けた。いや、この時まで、紺

の鯉^{こいぐち}口^{くち}に手首を縮^{すく}めて、案山子のごとく立ったりける。

「はははは、お言葉には及びません、饅頭屋さんで泊めるものは、醬^{おしたじ}油^{じゆ}の雨宿り

か、鯉^{かつおぶし}節^{せつ}の行者だろう。」

からから
と呵^か々^々と一人で笑った。

「お師匠さん、一つお酌さしておくんないまし。」と女房は市松の畳の端から、薄く腰
を掛込んで、土間を切って、差向いに銚子を取った。

「飛んでもない事、お忙しいに。」

「いえな、内^{げいこや}じゃ芸^{おも}妓^{おも}屋^{おも}さんへ出前ばかりが主^{おも}ですから、ごらんの通りゆっくりじゃ

えな。ほんにお師匠さん佳^いいお声^{こゑ}ですな。なあ、良^{あんた}人^{あんた}。」と、横顔で亭主を流^{ながしめ}眄^め。

「さよじゃ。」

とばかりで、煙^{たばこ}草^{くさ}を、ぱっぱっ。

「なあ、今お聞かせやした、あの博多節を聞いたればな、……私や、ほんに、身に染
みて、ぶるぶると震えました。」

五

「ほ^ほさ^さやるせ^{やるせ}な、酔も醒めそうで遣^遣瀬^瀬がない。たかが大道芸人

さ。」

あにい
と兄 哥は照れた風で腕組みした。

「私がお世辞を言うものですか、^{まったく}真 実 ですよ。あの、その、なあ、^{ぞっ}悚然とするよう
な、^{うっとり}恍惚 するような、^し緊めたような、投げたような、^な緩めたような、まあ、何んと言う
^よて可かろうやら。海の中に柳があつたら、お月様の影の中へ、身を投げて死にたいよ
うな、……何んとも言いようのない心持になったのですえ。」

と、^{くね}脊筋を曲 っ て、肩を入れる。

^{かた}
「お 方 、お方。」

^{せきこ}
と急 込 んで、^{ごてい}訳もない事に不機嫌な御 亭 が呼ばわる。

「何じゃいし。」と振向くと、……亭主いつの間にか、神棚の^{もと}下 に、^{しゃ}斜 と構えて、帳面

^{ひっく}
を引 繰 っ て、^{にら}苦く睨 み、

^{ますや} かけ
「升 屋 が 懸 はまだ寄越さんかい。」

^{そろばん}
と算 盤 を、ぱちりぱちり。

「今時どうしたえ、^{みそか}三十日でもありませんに。……お師匠さん。」

「師匠じゃないわ、升屋が懸じゃい。」

「そないに急に気になるなら、^{あんた}良 人、^きちやと行って取 っ て来い。」

と下唇の^{はねちようし}勿 調 子。亭主ぎやふんと^{てい}参 っ た 体 で、

「二進が一進、二進が一進、^{にいち}二 一 天作の五、^ご五 一 ^{ぐい}三 六 七 八 九。」と、饅

餡の帳の^{のびちぢ}伸 縮 みは、^{さしひき}加 減 だけで済むものを、^{したじ}醬 油 に水を割算段。

と釜の湯気の白けた処へ、星の凍てそうな按摩の笛。月天心の冬の町に、

あたかもこれこがらし凧を吹込む声す。

門附の兄哥は、ふと瘦せた肩を抱いて、

「ああ、霜に響く。」……と言った声が、物語を読むように、ほがらかさに朗に冴えて、且つ、鋭く聞えた。

「按摩が通る……おかみ女房さん、」

「ええ、笛を吹いてですな。」

「畜生、怪しからず身に染みる、たま堪らなく寒いものだ。」

と割膝にかしこま跪坐って、飲みさしの茶の冷えたのを、茶碗に傾け、ざぶりと土間へ、

「一ツこいつへ注いでおくん、その方がお前さんも手数が要らない。」

「何んの、私はちつとも構うことないのですえ。」

「いや、御深切はありがたやかんけしずみわさ、難有いが、薬罐の底へ消炭で、湧くあとから醒める処へ、

のどえぐ氷で咽喉を抉られそうな、あのパイパイを聞かされちゃ、からだにひびつ裂がはいりそうだ。……持って来な。」

と手を振るばかりに、一息にぐっとあお呷った。

「あれ、お見事。」

と目をつて、

「まあな、だけれどな、無理酒おいしいなえ。沢山、あの、心配する方があるのですやろ。」

「お方、八百屋の勘定は。」

と亭主 ^{まばた} 瞬 ^{あご} きして 頤 を出す。女房は面白半分、見返りもしないで、

「取りに来たらお払いやすな。」

「ええ……と三百は三銭かい。」

で、算盤を空に ^{はじ} 弾く。

^{おかみ}
「女房さん。」

と呼んだ門附の声が沈んだ。

「何んです。」

「立続けにもう一つ。そして ^{あと} 後 ^{がってん} を直ぐ、合 ^点 かね。」

「あい。合点でございますが、あんた、^{えら} 豪 ^{たいしゆ} い大酒 ですか。」

「せめて酒でも参らずば。」

と陽気な声を出しかけたが、つと仰 ^{あおむ} 向 ^{まなじり} いて 眦 を上げた。

「あれ、また来たぜ、按摩の笛が、北の方の辻から聞える。……ヤ、そんなにまだ夜

は更けまいのに、^{ごし} 屋根 ^{たんぼ} 越 ^{あぜ} の町一つ、こう……田 ^圃 の ^畔 かとも思う処でも吹いて
いら。」

^{みぜわ}
と身 ^{あてど} 忙 ^し そうに片膝立てて、当 ^所 なくしながら、

^{おと} 「音 ^ね は同じだが音 ^{おかみ} が違う……女 ^{つら} 房 ^顔 さん、どれが、どんな ^{按摩} の ^だ ね。」

と聞く。……その時、^{しろまなこ} 白 ^{あお} 眼 ^{のぞ} の座頭の首が、月に ^蒼 ざめて ^覗 きそうに、屋の
棟を高く見た……目が鋭い。

「あれ、あんた、鹿の ^{めすおす} 雌 ^雄 雄 ^{ようす} ではあるまいし、笛の音で按摩の ^容 子 ^は 分りませぬも
の。」

「まったくだ。」

と寂しく笑った、なみなみ注^ついだる茶碗の酒を、屹^{きつ}と見ながら、
「杯^くの月を酌もうよ、座頭殿。」と差^さ俯^ふいて独^{ひとりごと}言^{こと}した。……が博多節の文句
か、知らず、陰々として物寂しい、表の障子も裏透くばかり、霜の月の影冴えて、辻に、
町に、按摩の笛、そのあるものは波に響く。

六

「や、按摩どのか。何んだ、唐^{だしぬけ}突^つに驚かせる。……要らんよ。要りませぬ。」
と弥次郎兵衛。湊屋の奥座敷、これが上段の間とも見える、次に六畳の附いた
ちゆうふる^中古^この十畳。障子の背後は直ぐに縁、欄干^{うしろ}にずらりと硝子戸^{てすり}の外は、
みずけむりびよう^水煙^{けむり}渺^{びよう}として、曇らぬ空に雲か^{ながす}と見る、長洲^{ながす}の端に星一つ、水に近く^き晃^{きら}ら
めいた、揖斐川の流れの裾^{すそ}は、潮^{うしお}を籠めた霧白く、月にも苦^{とま}を伏せ、蓑^{みの}を乾^ほ
す、繫^{かかり}船^{ふね}の帆柱がすくすくと垣根に近い。そこに燭台を^{かたわら}傍^{わら}にして、火^ひ桶^{おけ}
に手を懸け、怪^{けげん}訝^{げん}な顔して、
「はて、お早いお着きお草^{くたび}臥^ふれ様で、と茶を一ツ持って出て、年^{としま}増^まの女中が、
ただいま^{ひっこ}唯^ひ今^こ引^ひ込んだばかりの処。これから膳にもしよう、酒にもしようと思うちよつとの
隙間へ、のそりと出した、あの面^{つら}はえ？……
この方、あの年増めを見送って、入^{いり}交^{かわ}って来るは若いのか、と前髪の正面でも
見ようと思えば、霜^{とう}げた冬^{かん}瓜^{わらじ}に草^{ぶちつ}鞋^{つら}を打^ふ着^{すま}けた、という異体な面^{つら}を、襖^{ふすま}の

影から斜^{はす}に出して、

(按摩でやす。)とまた、悪く抜^{ぬきえもん}衣紋^{ぬきえもん}で、胸を折って、横坐りに、蠟燭^{ろうそくび}火へ

かみぼや^{かみぼや}のかかった^{あかり}灯^{あかり}の向うへ、ぬいと半身で出た工合が、見越^{みこしにゆうどう}入道^{みこしにゆうどう}の

おやかた^{おやかた}めみえ^{めみえ}の雪女郎^{ゆきむすめ}を連れて出た、化^{ばけ}の慶庵^{けいあん}と言う^{てい}体^{てい}だ。

要らぬと言え、黙^{だんまり}然^{だんまり}で、腰から前^{さき}へ、板廊下の暗い方へ、スーと消えたり

……おんてき^{おんてき}たいさん^{たいさん}、怨敵^{おんてき}、退散^{たいさん}。」

と苦笑いして、……床の正面に火桶を抱えた、法然^{ほうねん}天窓^{あたま}の、連^{つれ}の、その爺^{おや}様を見遣って、

「捻平さん、お互に年は取りたくないね。ちと三^{ぺんぺん}絃^{ぺんぺん}でも、とあるべき処を、お膳の
前に按摩が出ますよ。……見くびったものではないか。」

「とかく、その年^{としが}効いもなく、旅籠屋の式台口から、何んと、事も^{いんぎん}慇懃^{いんぎん}に出迎えた、

うち^{うち}家の隠居らしい切髪^{ばあさま}の婆^{ばあさま}様をじろりと見て、

(ヤヤ、難^{ありがた}有^{ありがた}い、仏壇の中に美婦^{たば}が見えるわ、簀^すの子の天井から落ち度い。)など

と、膝栗毛の書拔きを遣らっしゃるで魔が魅^さすのじゃ、屋台は古いわ、造りも広大。」

と丸木の床柱を下から見上げた。

「千年の桑かの。川の底も料^{はか}られぬ。燈^{あかり}も暗いわ、獺^{かわうそ}も出ようず。ちと懲^こ

りさっしゃるが可^いい。」

「さん^{ぞうろう}候^{ぞうろう}、これに懲りぬ事なし。」

と奥歯のあたりを膨らまして^{ほほえ}微笑^{ほほえ}みながら、両手を懐に、胸を拡く、襖^{ふすま}の上な

額を読む。題して曰く、臨風榜可小楼。

「……とある、いかさまな。」

「床に活けたは、白の小菊じゃ、一東にして掴みざし、喝采。」と讃める。

「いや、翁寂びた事を言うわ。」

「それぞれ、たったいま懲りると言うた口の下から、何んじゃ、それは。やあ、見やれ、

そこ其許の袖口から、茶色の手の、もそもそとした奴が、ぶらりと出たわ、揖斐川の

かわうそ
獺の。」

「ほい、」

なが
と視めて、

なむさんぼう あわただ ひっこ
「南無三宝。」と慌しく引込める。

「何んじゃそれは。」

「ははははは、拙者うまれつき粗忽にいたして、よくものを落す処から、内の婆

どのが計略で、手袋を、ソレ、ト左右糸で繋いだものさね。袖から胸へ潜らして、ず

いと引張って両手へ嵌めるだ。何んと恐しかろう。捻平さん、かくまで身上を思

うてくれる婆どのに対しても、無駄な祝儀は出せませんな。ああ、南無阿弥陀仏。」

たぬき
「狸めが。」

と背を円くして横を向く。

「それ、年増が来る。秘すべし、秘すべし。」

で、手袋をたくし込む。

処へ女中が手を支いて、

「御支度をなさりますか。」

「いや、やっと、今草鞋^{わらし}を解いたばかりだ。泊めてもらうから、支度はしません。」と真面目に言う。

色は浅黒いが容子^{ようす}の可い^い、その年増の女中が、これには妙な顔をして、

「へい、御飯は召あがりますか。」

「まず酒から飲みます。」

「あの、めしあがりますものは？」

「姉さん、ここは約束通り、焼^{やきはまぐり}蛤^がが名物だの。」

七

「そのな、焼蛤は、今も町はずれの葦簀^{よしずばり}張^{まつかさ}なんぞでいたします。やっぱり松毬^{みりん}で焼きませぬと美味^{おいし}うござりませんで、当家では蒸したのを差上げます、味淋^{うち}入れ^{あじよ}て味美^{あじよ}う蒸します。」

「ははあ、菜螺^{さざえ}の壺^{つぼ}焼^{やき}といった形、大道店で遣りますな。……松並木を向うに見て、松毬のちよろちよろ火、蛤の煙がこの月夜に立とうなら、とんと竜宮の田^{でんがく}楽^でで、おとひめさま^{おとひめさま}しゃれ^{しゃれ}あね^{あね}乙^{おもむき}姫^姫様が洒落に姉さんかぶりを遊ばそうという処、また一段の趣^{おもしろ}だろ

うが、わざとそれがために忍んでも出られまい。……^{ここ}当家の味淋蒸、それが好^よかろう。」

おじご^{おじご}と小父者納得した顔して^{うなず}頷^くく。

「では、蛤でめしあがりますか。」

「何？」と、わざとらしく[#「わざとらしく」は底本では「わざとしらく」]耳を出す。

「あのな、蛤であがりますか。」

「いや、^{はし}箸で食いやしよう、はははは。」

^{ひとり}と独で笑って、懐中から膝栗毛の五編を一冊、ポンと出して、

^{ありがた}「難有い。」と額を叩く。

女中も思わず^{ふきだ}噴飯して、

「あれ、あなたは弥次郎兵衛様でございますな。」

「その通り。……この度の参宮には、都合あって五二館と云うのへ泊ったが、

^{ないぐうさま}内宮様へ参る途中、^{ふるいち}古市の旅籠屋、藤屋の前を通った時は、前度いかい世

話になった気で、薄暗いまで奥深いあの店頭に、^{みせさき}真鍮の獅噛火鉢がび
^{しんちゆう}しかみひばち
かぴかとあるのを見て、略儀ながら、車の上から、帽子を脱いでお辞儀をして来た。

が、町が狭いので、向う側の茶店の^{しんぞ}新姐に、この^{すこはげ}小兀を見せるのが辛かった
よ。」

^{あかり}と燈に向けて、てらりと光らす。

「ほほ、ほほ。」

「あはは。」

で捻平も打笑うと、……この機会に誘われたか、——^{さつき}先刻二人が着いた頃には、
三味線太鼓で、トトン、ジャカジャカじゃじゃじゃんと沸返るばかりだった——ちょうど

^{あゆみ}ハツ橋形に歩行板が^{かか}架って、土間を隔てた隣の座敷に、およそ十四五人の同勢

で、女交りに騒いだのが、今しがた按摩が影を見せた時分から、^{おおかわ}大河の^{しお}汐に引

かれたらしく、ひとけはい^{ひとけはい}、ひとしきり人^{ぼう}気^の勢^{しん}が、遠くへ裾^{しん}拡がりに^{ぼう}茫と退いて、寂とした。た

だだっ広い中を、猿が鳴きながら走廻るように、キャキャとする^{おしゃく}雛^{かんばし}妓の^あ甲^走走っ

た声が聞えて、重く、ずっしりと、^{おっ}覆^{たにんず}かぶさる風に、何を話すともなく^{たにんず}多人^ず数の物音

のしていたのが、この時、^{ほらあな}洞^{どっ}穴^{どよ}から風が抜けたように^{どっ}哄と^{どよ}動揺めく。

女中も笑い引きに、すっと立つ。

「いや、この方は陰々としている。」

「その方が無事で可いの。」

と捻平は火桶の上へ脊くぐまって、そこへ投出した^{さしのぞ}膝栗毛を^さ差^覗覗き、

「しかし思いつきじゃ、^{わし}私^{まくらもと}はどうもこの寝つきが悪いで、今夜は一つ^{まくらもと}枕^許許の

^{あんどん}行^{あんどん}燈^許で読んでみましょう。」

^よ「止しなさい、これを読むと胸が^{せま}切^{せま}って、なお目が冴えて寝られなくなります。」

「何を言わっしゃる、^{あてごと}当^{あてごと}事^{わし}もない、膝栗毛を見て泣くものがあるかい。私^{わし}が事を

言わっしゃる、^{そこ}其^{そこ}許^{そこ}がよっぽど捻平じゃ。」

と言う処へ、以前の年増に、^{こおんな}小^{こおんな}女^{こおんな}がついて出て、膳と銚子を揃えて運んだ。

^じ「蛤は直きに出来ます。」

^{よし}「可、可。」

「何よりも酒の事。」

捻平も、^{ちょこ}猪^{ちょこ}口^{ちょこ}を急ぐ。

「さて ^{てめえ} 汝にも一つ遣ろう。 ^{かん} 爛の可い処を一杯遣らっし。」と、弥次郎兵衛、酒飲み

の癖で、ちとぶるぶるする手に一杯傾けた ^{ちよこ} 猪口を、膳の外へ、その膝栗毛の本の

^{わき} 傍へ、畳の上にちゃんと置いて、

「姉さん、一つ ^つ 酌いでやってくれ。」

と真顔で言う。

小女が、きよとんとした顔を見ると、捻平に追っかけの酌をしていた年増が見向いて、

^{きの} 「喜野、お酌ぎ……その旦那はな、弥次郎兵衛様じゃで、喜多八さんにお杯を上げな
さるんや。」

と早や心得たものである。

八

^{おじご} 小父者はなぜか調子を沈めて、

「ああ、よく言った。俺 ^{おれ} を弥次郎兵衛は ^{ありがた} 難 ^い 有 ^い 。居 ^い 心 ^い は ^{よし} 可 ^い 、酒は可。これで

喜多八さえ一所だったら、膝栗毛を ^{しょう} 正 ^し のもので、太平の民となる処を、さて、杯をさ

したばかりで、こ ^つ う酌 ^ろ いた酒へ、 ^{ろうそく} 蠟 ^ひ 燭 ^ひ の灯のちらちらと映る処は、どうやら餓鬼に

^{たむ} 手向けたようだ。あのまた馬鹿野郎はどうしている——」と膝に手 ^つ を支 ^つ き、畳の杯を

^{じっ} 凝 ^つ と見て、陰気な顔する。

捻平も、ふと、この時横を向いて腕組した。

「旦那、その喜多八さんを何んでお連れなさりませんね。」

あいきょうづく
と愛嬌造って女中は笑う。弥次郎 寂しく打笑み、

「むむ、そりゃ何よ、その本の本文にある通り、伊勢の山田ではぐれた奴さ。いい年を

して しゃばつけ 気な、酒も飲めば ぶざけ 巫山戯もするが、世の中は道中同然。暖いにつけ、寒

いにつけ、杖 柱とも思ふ同伴の若いものに別れると、六十の まいご 迷児になって、もし、

この辺に棚からぶら下がったような宿屋はござりませんか、にぎや 賑かな町の中を独

りどぼとぼと尋ね 飽 倦んで、もう 落胆 しゃした、と云ってな、どっかり知らぬ 家の

みせさき 店頭へ腰を 落としこ 込んで、一服無心をした処……あすこを読むと 串 戯 ではな

い。……捻平さん、真からもって涙が出ます。」

と言う、まぶた 瞼に映って、蠟燭の火がちらちらとする。

「姉や、しん 心を切ったり。」

「はい。」

と女中が向うを向く時、捻平も目をしばたいたが、

「ヤ、あの騒ぎわい。」

と鼻の下を長くして、ごし となり 土間越の隣室へ傾き、

えら かなだらい 豪いぞ、金 盃まで持ち出したわ、人間は皆裾が天井へ宙乗りして、畳を皿

小鉢が躍るそう。おおおお、三味線太鼓が し の ぎ 鑊 を削って打合う様子じゃ。」

「もし、お騒がしゅうござりましょう、お気の毒でござります。ちょうど霜月でな、今年度の新兵さんが入営なさりますで、その送別会じゃ言うて、あっちこっち、皆、この景気

でござります。でもな、お寝ります時分には時間になるで静まりましょう。どうぞ御辛抱なさいまして。」

「いやいや、それには及ばぬ、それには及ばぬ。」

と小父者、二人の女中の顔へ、等分に手を掉^ふって、

「かえって賑かで大きに可い。悪く寂^{ひっそり}寞^{だしぬけ}して、また唐^だ突^しに按摩に出られては弱
るからな。」

「へい、按摩がな。」と何か知らず、女中も読めぬ顔して聞返す。

捻平この話を、打消すように^{しわぶき}咳^{せき}して、

「さ、一^{いっこん}献^{けん}参ろう。どうじゃ、こちらへも酌人をちと頼んで、……ええ、それ何んとか
言うの。……桑名の殿様時^{しぐれ}雨^{あめ}でお茶漬……とか言う、土地の唄でも聞こうではない
かの。陽気にな、かつと一つ。旅の恥は搔^{かきす}棄^{ぬし}てじゃ。主^{まなこ}はソレ叱^し言^ごのような勧進
帳でも遣らっしゃい。」

染めようにも髯^{ひげ}は無いで、私^{わし}はこれ、手拭でも畳んで法^{ほう}然^{ねん}天^あ窓^{たま}へ載せよう
での。」と捻平が坐りながら腰を伸して高く居直る。と弥次郎^{まなこ}眼^{まなこ}を^こって、

「や、平家以来の謀^{むほん}叛^{そこ}、其許の発議は珍らしい、二方^{にほう}荒^{こう}神^{じん}鞍^{くら}なしで、真^{まんなか}中^{なか}
へ乗りやしょう。」

と^{おびただ}夥^たしく景気を直して、

「^{あんね}姉^ねえ、何んでも構わん、四五人^{きやり}木^ひ遣^ひで曳いて来い。」

と肩を張って大きに力む。

女中酌の手を差控えて、銚子を、膝に、と真^ま直^{すぐ}に立てながら、

「さあ、今あっちの座敷で、もう一人二人言うて、お掛けやしたが、喜野、芸^{げいこ}妓^こさんは
あったかな。」

いくび うなず
小女が猪首で 額 き、

「誰も居やはらぬ言うてでやんした。」

「かいな、旦那さん、お気の毒さまでござります。狭い土地に、数のない芸妓やによつ

て、こうして会なんぞ ^{たてこ}立 込 ^{めぼし こ}みますと、目 ^{みんな}星 ^皆い ^出妓 ^払たちは、ちゃつとの間に ^皆出 ^払払

います。そうか言うて、東京のお客様に、あんまりな人も見せられはしませずな、

きりよう ^い
容 ^色 ^が好 ^いとか、芸 ^がた ^ぎつ ^たとかいうのでござりませぬとなあ……」

「いや、こうなつては、宿賃を払わずに、こちとら ^{よにげ}夜 ^遁をするまでも、三味線を聞かな

きゃ納まらない。 ^{めっかち} ^眇、いぐちでない以上は、古道具屋からでも呼んでくれ。」

「待ちなさりまし。おお、あの島屋の ^{しんこ}新 ^妓 ^{さん}ならきつと居るやろ。聞いて見や。喜野、

ソレお急ぎじゃ、廊下走って、電話へ ^{かか} ^掛 ^れや。」

九

「持って来い、さあ、何んだ ^{かざぐるま} ^風 ^車。」

急に ^{いきおい} ^い ^勢 の可い声を出した、饅饨屋に飲む博多節の ^{あにい} ^兄 ^哥は、霜の上の

^{かんざけ} ^爛 ^酒 で、月あかりに直ぐ醒める、色の白いのもそのままであったが、二三杯、

あおつきり ^{ふち} ^{さつ} ^{よい}
^呷 ^切 の茶碗酒で、目の ^縁 へ、颯と酔 ^が ^出 ^た。

「勝手にパイパイ吹いておれ、でんでん太鼓に ^{しょう} ^笙 の笛、こっちあ ^{こども} ^小 ^見 ^だ、なあ、

おっか ^{おかみ}
阿 ^媽。……いや、女 ^房 ^{さん}、それにしても何かね、御当処は、この桑名と云う所は、

按摩の多い所かね。」と笛の音に瞳がちらつく。

「あんたもな、按摩の目は ^{かき} 蠟 や云います。名物は ^{はまぐり} 蛤 じゃもの、別に何も、多い訳はないけれど、ここは ^{しんち} 新地 なり、旅籠屋のある町やに因って、つい、あの ^{しゆ} 衆 が、あちこちから稼ぎに来るわな。」

「そうだ、成程 ^{くるわ} 新地 だった。」となぜか一人で納得して、気の抜けたような片手を ^つ 支く。

「お師匠さん、あんた、これからその音声を ^{のど げいこや かど} 芸妓屋の門 で聞かしてお見やす。ほん ^{ひとじに} に、人死 が出来ようも知れぬぜな。」と襟の処で、塗盆をくるりと廻す。

「飛んだ合せかがみだね、人死が出来て ^{たま} 堪るものか。第一、^{げいしゃや} 芸妓屋の前へは、うっかり立てねえ。」

「なぜえ。」

「悪くすると ^{かたき} 敵 に ^{でっくわ} 出 ^{なげくび} 会 ^す する。」と投首する。

「あれ、芸が身を助けると言う、……お師匠さん、あんた、^{げいこ} 芸妓ゆえの、お身の上かえ。……ほんにな、^{かたき} 仇 だすな。」

「違った！ 芸者の方で、私が敵さ。」

「あれ、のけのけと、あんな憎いこと言いなさんす。」と言う処へ、月は片明りの向う側。

狭い町の、もの ^{けはい} の氣勢 にも暗い軒下を、からころ、からころ、^{こまげた} 駒下駄の音が、土間に ^{しみこ} 浸込むように響いて来る。……と直ぐその ^{あしもと くぐ} 足許 を潜るように、按摩の笛が寂しく聞える。

^{きつ} 門附は 屹 と見た。

「噂をすれば、^{げいこ} 芸妓はんが通りまっせ。あんた、見たいなら障子を開けやす……そのかわり、敵打たりよと思うてな。」

「ああ、いつでも打たれてやら。ちよッ、可厭に^{いや うるさ}煩く笛を吹くない。」

かたりと^{かど}門の戸を外から開ける。

「ええ、吃^{びっくり}驚すら。」

「今晚は、——^{ぞうりば}饅頭六ツ急いでな。」と草履穿きの半纏^{はんてんぎ}纏着、背中へ白く月を浴びて、赤い鼻をぬいと出す。

「へい。」と筒抜けの高調子で、亭主帳場へ棒に^{つつた}突立ち、

「お方、そりゃ早うせぬかい。」

女房は澄ましたもので、

「美しい^{あしおと}躰音やな、どこの？」と聞く。

「こないだ山田の新町から住替えた、こんの島家の新^{しんこ}妓じゃ。」と言いながら、鼻赤

の若い衆は、^{のぞ}覗いた顔を外に曲げる。

と門附は、^{うしろ}背後の壁へ胸を反らして、ちよつと伸上るようにして、戸に立つ男の肩越

しに、^{こう}皎とした月の^{くるわ}廓の、^{とおり}細い通を見透かした。

駒下駄はちと音低く、まだ、からころと響いたのである。

^{たんと}「沢山出なさるかな。」

「まあ、こんの饅頭のように行かぬで。」

「その気で、すぐに届けますえ。」

「はい頼んます。」と、男は返る。

亭主帳場から^{うしろ}背後向きに、^{ひよりげた}日和下駄を探つて下り、がたりびしりと手当り強く、そこ

^{ひろぶた}へ^{だしか}広蓋を出掛ける。ははあ、夫婦二人のこの店、気の毒千万、御亭が出前持を

兼ねると見えたり。

「裏表とも気を注げるじゃ、^つ可いか、^え可いか。ちょっと道寄りをして来るで、可いか、お方。」

とそこいらじろじろと^{ねめまわ}睨廻して、新地の月に^{ちょうちんい}提灯入らず、片手懐にしたなりで、亭主が出前、ヤケにがっとうを開けた。^{あと}後を閉めないで、ひよこひよこ出て行く。

釜の湯気が^{さつ}颯と分れて、門附の頬に影がさした。

女房横合から来て、

「いつまで、うっかり見送ってじゃ、そんなに^{かたき}敵が打たれたいの。」

^{おかみ}「女房さん、桑名じゃあ……芸者の箱屋は按摩かい。」と^{ぞつ}慄気としたように肩を細く、この時やっとう居直って、女房を見た、色が悪い。

十

「そうさ、いかに伊勢の^{はまおぎ}浜荻だって、按摩の箱屋というのはなかりう。私もなかりう

と思うが、今向う側を何んとか屋の^{しんこ}新妓とか云うのが、からんころんと通るのを、何

心なく見送ると、あの、一軒おき二軒おきの、^{のきあんどん}軒行燈では^{あさぎ}浅葱になり、月影で

は青くなって、薄い紫の座敷着で、^{つま けだ}褌を蹴出さず、ひっそりと、白い襟を^{うつむ}俯向いて、

足の運びも進まないように何んとなく^{しお}悄れて行く。……その^{あと}後から、鼠色の影法師。

女の影なら月に^{つち は はず}地を這う筈だに、寒い^{どうろくじん}道陸神が、のそのそと四五尺離れた処

を、^{むこう}ずっと前方まで附添ったんだ。腰附、肩附、^{ある ふり}歩行く振、^{くつつ}捏つちて附着けたような

ぶかっこう あたま
不 恰 好な天 窓の工合、どう見ても按摩だね、^{めくら}盲人らしい、めんない千鳥よ。……

私あ何んだ、だから、按摩が箱屋をすると云っちゃ^{おかし}可笑い、^{めくら}盲目になった箱屋かも
知れないぜ。」

「どんな風の、どれな。」

^{かど}
と門 へ出そうにする。

「いや、もう見えない。呼ばれた^{うち}家 へ入ったらしい。二人とも、ずっと^{さき}前方で居なくなっ
た。そうか。ああ、盲目の箱屋は居ねえのか。アまた^ふ殖えたぜ……影がさす、笛の音
に影がさす、按摩の笛が降るようだ。この寒い月に^{つも}積 ったら、桑名の町は針の山に
なるだろう、^{たま}堪 らねえ。」

^{あお}
とぐいと呷 って、

「ええ、ヤケに飲め、一杯どうだ、^{おかみ}女 房さん附合いねえ。御亭主は留守だが、

^{あけつぱな}
明 放 しよ、……構うものか。それ向う三軒の屋根越に、雪坊主のような山の影
^{のぞ}
が 覗 いてら。」

と門を振向き、あ、と叫んで、

「来た、来た、来た、来やあがった、来やあがった、按摩々々、按摩。」

^{いき つ}
と呼吸も吐かず、^{せきこ}続けざまに急 込んだ、自分の声に、町の中に、ぬい、と立って、

^{あしもと} ^{はすつか} ^{つっぱ} ^{あおむ}
杖を脚 許 へ斜 交 いに突 張りながら、目を白く仰 向いて、月に小鼻を照らさ
れた流しの按摩が、呼ばれたものと心得て、そのまま^{いてつ}凍 附くように立留まったのも、

門附はよく分らぬ^{さま}状 で、

「影か、影か、^{おつかあ}阿 媽、ほんとの按摩か、影法師か。」

と激しく聞く。

「ほんとなら、どうおしる。^{あんた}貴 下、そんなに按摩さんが恋しいかな。」

「恋しいよ！ ああ、」

^{いき}つと呼吸を吐いて、見直して、^{ひそ}眉を 顰めながら、^{こわだか}声 高に笑った。

「ははははは、按摩にこがれてこの^{てい}体 さ。おお、按摩さん、按摩さん、さあ入ってくんねえ。」

^{ばち}の ^{しょうぎ}門附は、撥を除けて、床 几を叩いて、

「一つ頼もう。^{おかみ}女 房さん、済まないがちよいと借りるぜ。」

「この畳へ来て横におなりな。按摩さん、お客だす、あとを閉めておくんなさい。」

「へい。」

コトコトと杖の音。

「ええ……とんと早や、影法師も同然なもので。」と^{かす}掠れ声を白く出して、黒いけんち

^{ようかんいろ}ひふ、^{ともしび}ともしびの被布を着た、^{しわ}しわの影は、赤くその皺の中へさし込んだが、

日和下駄から消えても失せず、片手を泳ぎ、片手で酒の香を^{かぎわ}嗅分けるように入った。

「聞えたか。」

とこの門附は、権のあるものいいで、五六本銚子の並んだ、膳をまた^{わき}傍へずらす。

「へへへ」とちよっと鼻をすすって、ふん、とけなりそうに^{におい}香を嗅ぐ。

「待ちこがれたもんだから、^{そと}戸外を犬が走っても、按摩さんに見えたのさ。こう、悪く言

うんじゃないぜ……そこへぬっくりと^{あらわ}顕れたろう、酔っている、幻かと思った。」

「ほんに待兼ねていなさったえ。あの、笛の音ばかり気にしなさるので、私もどうやら
よ
解めなんだが、やっと分ったわな、何んともお待遠でござんしたの。」

「これは、おかみさま、^{ごはんじょう}御繁昌。」

「お客はお一人じゃ、ゆっくり療治してあげておくれ。それなりにお寝^よったら、お泊め申
そう。」

と言う。

按摩どの、けろりとして、

「ええ、その気で、念入りに一ツ、^{つかま}掴りましょうで。」と我が手を握って、^{ひし}拉ぐよう
に、ぐいと揉^もんだ。

「へい、旦那。」

「旦那じゃねえ。ものもらいだ。」とまた^{あお}呻る。

女房が^{そっ}にら
竊と睨んで、

「滅相な、あの、言いなさる。」

十一

「いや、横になるどころじゃない、沢山だ、ここで沢山だよ。……第一背中へ^{つか}掴まら

れて、一呼吸でも^{ひといき}こた
えられるかどうか、実はそれさえ^{おぼつか}覚束ない。悪くすると、

そのまま目を^{まわ}眩して^{ぶったお}打倒れようも知れんのさ。^{てい}体よく按摩さんに掴み殺される
といった形だ。」

と真顔で言う。

「飛んだ事をおっしゃりませ、田舎でも、これでも、長年年期を入れました杉山流のも

のでござります。^{きゅうび はり}鳩尾に鍼をお打たせになりまして、決して間違いのあるような

ものではござりませぬ。」と^{あき}呆れたように、^{む あお}按摩の剥く目は蒼かりけり。

「うまい、まずいを言うのじゃない。いつの^{いくか}幾日にも^{なんどき}何時にも、^{しやれ}洒落にもな、生れてからまだ一度も按摩さんの味を知らないんだよ。」

「まあ、あんなにあなた、こがれなさった癖に。」

「そりゃ、張って張って仕様がなから、目にちらつくほど待ったがね、いざ……となる

^{ういざん}と初産です、^{きゅう}灸の皮切も同じ事さ。どうにも勝手が分らない。痛いんだか、^{かゆ}痒

いんだか、^{うわさ}風説に囚ると^{くすぐ}擦りたいとね。多分私も擦ったかろうと思う。……ところ

があいにく、^{おふくろ}母親が操正しく、これでも^{まおとこ こ}密夫の児じゃないそうで、その擦ったがり

ようこの上なし。……あれ、あんなあの、^{にぎりめし}握飯を^{こさ}拵えるような手附をされる、と

その手で揉まれるかと思ったばかりで、もう^{たま}堪らなく擦りたい。どうも、ああ、こりゃ

^{いけね}不可え。」

と脇腹へ^{りょうひじ}両脇を、しっかりついて、^{かいすく}搔竦むように^よ脊筋を捻る。

「ははははは、これはどうも。」と按摩は手持不沙汰な風。

^{あらた}女房更^{のぞ}めて顔を覗いて、

「何んと、まあ、可愛らしい。」

「同じ事を、^{かわいそう}可哀想だ、と言ってくんねえ。……そうかと言って、こう張っちゃ、身も

皮も石になって^{かたま}固りそうな、^{せなか}背が^{つま}詰って胸は裂ける……揉んでもらわなくて

やりき
は遣切れない。遣れ、構わない。」

と激しい声して、片膝を^{きつ}屹と立て、

「殺す気で^{かか}蒐れ。こっちは覚悟だ、さあ。ときに女^{おかみ}房さん、袖^{そです}摺り合うのも

たしょう
他^{たしょう}生の縁ッさ。旅空掛けてこうしたお世話を受けるのも^{さき}前の世の何かだろう、何

んだか、おなごりが^{おし}惜いんです。掴^{つかみころ}殺されりやそれきりだ、も一つ^{はばか}憚りだ
がついでおくれ、別れの杯になろうも知れん。」

^{しずく}と雫を切って、ついと出すと、他愛なさもあんまりな、目の色のvarietyよう、^{まなじり}眦

^{きつ}も屹となつたれば、女房は気を打たれ、^{だんまり}黙然でただ目をる。

「さあ按摩さん。」

「ええ、」

^{おかみ}女房さん^つ酌いどくれよ！」

「はあ、」と酌をする手がちと震えた。

この茶碗を、一息に仰ぎ干すと、按摩が手を掛けたのと一緒であった。

がたがたと身震いしたが、^{おもて}面は^{さいわい}幸に紅潮して、

「ああ、^{はらわた}腸へ^{しみとお}沁透る！」

「何かその、何事か存じませぬが、按摩は大丈夫でござります。」と、これもおどつく。

「まず、」

^{つっぱ}と突張った手をぐたりと緩めて、

「^{いのち}生命に別条は無さそうだ、しかし、しかし^{こた}応える。」

とがっくり^{うつむ}俯向いたのが、ふらふらした。

「月は寒し、炎のようなその指が、火水となって骨に響く。胸は冷い、耳は熱い。肉は燃える、血は冷える。あっ、」と言って、両手を落した。

びっくり
吃驚して按摩が手を引く、そのくちばし たこ
嘴 や 鱈 に似たり。

あにい
兄 哥 は、しっかり起直って、

「いや、手をやすめず遣ってくれ、あわれと思って 静 かに……よしんば 徐 と揉まれた処で、私は五体が碎ける思いだ。

その思いをするのが可厭さに、いろいろに悩んだんだが、避ければ摺着く、過ぎれ

ひっぱ
ば引張る、逃げれば追う。形が無ければ声がする……パイパイ笛は 攻 太 鼓 だ。

こうひしひしと寄着かれちゃ、弱いものには我慢が出来ない。淵に臨んで、 岨 の

みお ふみとど きもだま まさかさま
上に瞰下ろして踏留まる胆玉のないものは、真逆に飛

込みます。破れかぶれよ、按摩さん、従兄弟再従兄弟か、伯父甥か、親類なら、さ

かたき
あ、敵を取れ。私はね、……お仲間の按摩を一人殺しているんだ。」

十二

「今からちょうど三年前。……その年は、この月から一月 後 の師走の末に、名古

屋へ用があつて来た。ついでは悪いけれど、 稼 の繰廻しがどうにか附い

て、参宮が出来るといふのも、お伊勢様の 思 召、冥加のほど難有い。ゆ

つくり ふるいち とうりゆう
古市に逗留して、それこそついでに、…… 浅熊山の雲も見よう、鼓ヶ

たけ しらべ ふたみ
嶽の調も聞こう。二見じゃ初日を拝んで、堺橋から、池の浦、沖の島で空が別
れる、上 郡 から志摩へ入って、日 和 山 を見物する。……海が凧いなら船を
出して、伊良子ヶ崎の海 鼠 で飲もう、何でも五日六日は逗留というつもりで。……山
田では尾上町の藤屋へ泊った。驚くべからず——まさかその時は私だって、浴衣に
あわせ
裕 じゃ居やしない。

もんつき しま かさね
着換えに 紋 付 の一枚も持った、縞 で襲衣の若旦那さ。……ま、こう、雲助が
けいせいがい まけおし
傾 城 買 の昔を語る…… 負 惜 みを言うのじゃないよ。何も自分の働きでそう
した訳じゃないのだから。——聞きねえ、親なり、叔父なり、師匠なり、恩人なりという、
……私が稼業じゃ江戸で一番、日本中の家元の大黒柱と云う、すこはげ つら
少 兀 の苦い 面
おやし
した阿 父 がある。

がんしよく ふざけ えどっこ ぎょうねん
いや、その 顔 色 に似合わない、気さくに巫山戯た江戸児でね。行 年 その
時六十歳を、三つと刻んだはおかしいが、数え年のサバを算んで、私が代理に宿帳
をつける時は、天地人とか何んとか言って、ぜん
禪 の問答をするように、指を三本、ひよ
いと出してギロリと 睨 む……五十七歳とかけと云うのさ。可いかね、その気だもの
……旅籠屋の女中が出てお給仕をする前では、おとつ
阿 父 さんが大の禁句さ。……与一
てめえ さだくろう ねじま
兵衛じゃあるめえし、 汝 、定 九 郎 のように呼ぶなえ、と唇を捻 曲 げて、叔父さ
んとも言わせねえ、兄さんと呼べ、との御意だね。

この叔父さんのお供だろう。道中の面白さ。酒はよし、景色はよし、日和は続く。どこ
へ行っても女はふらない。師走の山路に、嫁菜が盛りで、しかも 大 輪
おおりん
が咲いてい

た。

とこの桑名、四日市、亀山と、伊勢路へ^{かか}掛った汽車の中から、おなじ切符のたれ
かれが——その^{もよおし}催について名古屋へ行った、私たちの、まあ……興行か……

その興行の^{うわさ}風説をする。嘘にもどうやら、私の評判も^よ可さそうな。叔父はもとより。

……何事も言うには及ばん。——私が口で^{しゃべ}饒舌っては、流儀の恥になろうから、ま
あ、何^{なにがし}某と言ったばかりで、世間は承知すると思つて、聞きねえ。

ところがね、その私たちの事を言うついでに、この伊勢へ入ってから、きっと一所に
出る、人の名がある。可いかい、山田の古市に^{そういち}惣市と云う^{あんまはり}按摩鍼だ。」

門附はその名を言う時、うっとりと瞳を据えた。^{せなか}背を^{いだ}抱くように^{うしろ}背後に立った
按摩にも、^{しょうぎ}床几に近く裾を投げて、向うに腰を掛けた女房にも、目もくれず、^{じつ}凝と

天井を仰ぎながら、^{むなさき}胸前にかかると湯気を忘れたように手で^{さば}捌いて、

「按摩だ、がその按摩が、旧^{もと}はさる大名に仕えた士族の^{はて}果で、聞きねえ。私等が

流儀と、^{おんな}同じその道の芸の上手。江戸の宗家も、本山も、当国古市において、一

人で兼ねたり、という^{いきおい}勢で、自ら^{そうざん}宗山と名告る^{なの}天狗。高慢も高慢だが、また

出来る事も出来る。……東京の本場から、誰も来て^{おびや}怯かされた。^{それがし}某も参つ

^{ひし}て拉がれた。あれで一眼でも有ろうなら、三重県に居る^{しろもの}代物ではない。今度名古

屋へ来た連中もそうじゃ、^{にせもの}贋物ではなからうから、何も宗山に稽古をしてもらえと

は言わぬけれど、^{うなぎ}鰻の^{ほか}他に、^{たい}鯛がある、味を知って帰れば可いに。——と

さいはじ あきんど
才 発 けた 商 人 風のと、でっぴりした金の入歯の、土地の物持とも思われる奴

の話したのが、^{うわさ}風説の中でも耳に付いた。

叔父はこくこく坐 ^{いねむり} 睡 をしていたっけ。私 ^{わっし} あ若気だ、襟巻で顔を隠して、^{にら}睨む
ように二人を見たのよ、ね。

宿の藤屋へ着いてからも、わざと、叔父を一人で湯へ遣り……女中にもちよっと聞く。

……^{あいさつ}挨拶に出た番頭にも、按摩の惣市、宗山と云う、これこれした芸人が居るか、
と聞くと、誰の返事も同じ事。思ったよりは高名で、現に、この頃も藤屋に泊った、

^{なにがしこう}何 某 侯 の御隠居の御召に因って、^{かみしも}上 ^し下 で座敷を勤た時、(さてもな、鼓ヶ嶽
が近いせいか、これほどの松風は、東京でも聞けぬ、)と御賞美。

^{てきら}(的 等にも聞かせたい。)と宗山が言われます、とちよろりと饒 ^{しゃべ} 舌 った。私 ^{わっし} が

^{なかま}夥 間を——(的等。)と言う。

的等の ^{いちにん}一 人、かく言う私だ……」

十三

「なお聞けば、古市のはずれに、その惣市、小料理屋の店をして、^{めかけ}妾 の三人もあ

る、大した ^{いきおい}勢 だ、と言うだろう。——何を！……按摩の分際で、宗家の、宗の字、

この道の、本山が ^{すさま}凄 じい。

こう、按摩さん、舞台の ^{さし}差 ^{かに}は堪忍してくんな。」

と、^{そっ}竊 と痛そうに胸を ^{おさ}圧 えた。

「後で、よく気がつけば、信州のお百姓は、東京の芝居なんぞ、ほんとの^{しし}猪はないとて威張る。……な、宮重大根が日本一なら、^{かぶ}蕪の千枚漬も皇国無双で、早く言えば、この桑名の、焼蛤も三都無類さ。

その気で居れば可いものを、二十四の前厄なり、若気の^{いちず}一^{いらいら}図に^{しやく}苛^{かつ}々して、第一その宗山が気に入らない。(的等。)もぐつと^{しやく}癩^{かつ}に障れば、妾三人で^な赫とした。

維新以来の世がわりに、……^{ひとしきり}一時^{なかま}私等の稼業がすたれて、^な夥間^なが食うに困ったと思え。弓矢取っては一万石、大名株の芸人が、^{ようじ}イヤ楊枝^なを削る、かるめら焼を露店で売る。……^{そばや}蕎麦屋の出前持になるのもあり、現在私がその^{おじご}小父者などは、田舎の役場に小使いをして、濁り酒のかずに酔って、^{たんぼ}田圃^{あぜ}の^な畝^なに寝たもんです。

……

その妹だね、可いかい、私の^{おふくろ}阿母^なが、振袖の年頃を、困る処へ附込んで、^{こがね}小^{かせ}金を溜めた按摩めが、ちとばかりの貸を^な枷^なに、妾にしよう、と追い廻わす。——^{あぶな}危^{かご}く駒下駄を踏返して、^な駕籠^なでなくっちゃ見なかった隅田川へ落ちようとしたっさ。——その話にでも嫌いな按摩が。

ええ。

待て、見えない両眼で、^{うぬ}汝^{あかる}が身の程を^な明^なく見るよう、療治を一つしてくりよう。

^{あくるひ}で、翌^な日は謹んで、参拝した。

その尊さに、その晩ばかりはちっとの酒で宵寝をした、叔父の夜具の裾を叩いて、

^{まくらもと}枕^な許^なへ水を置き、

(女中、そこいらへ見物に、)

と言った心は、穴を^{おさ} 圧 えて、宗山を退治る^{りょうけん} 料 簡 。

と出た、風が荒い。荒いがこの風、五十^{いすずがわ} 鈴 川で^{かぎ} 劃 られて、宇治橋の向うまでは

吹くまいが、相の山の長坂を下から^{どっ} 哄 と吹上げる……これが悪く^{なまぬる} 生 温 くて、

あかり^{あかり} 灯 の前じゃ砂が黄色い。月は雲の底に^{どんよ} 淀 りしている。神^{かみじやま} 路 山 の樹は^{あお} 蒼

くても、二見の波は白かろう。^{ひど} 酷 い^{いきおい} 勢 、ぱっと吹くので、たじたじとなる。帽子

が飛ぶから、そのまま、藤屋が店へ投返した……と脊筋へ^{はら} 孕 んで、坊さんが忍ぶよ

うに羽織の袖が^{ひらひら} 翻 々 する。着換えるのも面倒で、屋間のなりで、神^{かみもう} 詣 での紋

付さ。——袖畳みに^{ふところ} 懐 中 へ^{ねじこ} 捻 込んで、何の洒^{しやれ} 落 にか、手拭で頬被りをしたもん
です。

門附になる前兆さ、^{ざま} 状 を見やがれ。」と片手を袖へ、二の腕深く突^{つっこ} 込んだ。片手で

ねら^{ねら} 狙 うように茶碗を^{おさ} 圧 えて、

「ね、古市へ行くと、まだ宵だのに^{ひっそり} 寂 然 している。……軒が、がたぴしと鳴って、

のきあんどん^{のきあんどん} 軒 行 燈 がばッばッ揺れる。^{さみせん} 三 味 線 の音もしたけれど、^{ふき} 吹 さらわれて大屋根

へ猫の姿でけし飛ぶようさ。何の事はない、今夜のこの寂しい新地へ、風を持って来

^{ぶつつ} て、打 着 けたと思えば可い。

一軒、^{つち} 地 のちと^{くぼ} 窪 んだ処に、^{どぶいた} 溝 板 から直ぐに竹の^{てすり} 欄 干 になって、^{もうせん} 毛 氈

の端は^{はねあが} 匆 上 り、畳に赤い島が出来て、洋^{ランプ} 燈 は油煙に^{くすぶ} 燻 ったが、^{まっしろ} 真 白 に

塗った姉さんが一人居る、空気銃、吹矢の店へ、ひよろりとして^{ひっかか} 引 掛 ったね。

とっつ ひじ つ まなこ だるまさま
取 着きに、肱 を支いて、怪しく正面に 眼 の光る、悟った顔の 達 磨 様と、女
の顔とを、七分三分に狙いながら、

(この辺に宗山ッて按摩は居るかい。)とここで実は様子を聞く気さ。押懸けて行こうた
ってちっとも勝手に知れないから。

(先生様かね、いらっしゃります。)と何と、(的等。)の一人に、先生を、しかも、様づけ
に呼ぶだろう。

(実は、その人の何を、一つ、聞きたくって来たんだが、誰が行っても頼まれてくれる

だろうか。)と尋ねると、大熨斗を書いた幕の影から、色の 蒼い、鬢 の乱れた、

や ちゅうどしま ちかづき
瘦せた中 年 増 が顔を出して、(知 己 のない、旅の方にはどうか知らぬ、お

のぞみ
望 なら、内から案内して上げましょうか。)と言う。

はず
茶代を奮発んで、頼むと言った。

(案内して上げなはれ、可い旦那や、気を付けて、)と 目 配 をする、……と雑作は

ない、その塗ったのが、いきなり、欄干を 跨 いで出る奴さ。」

十四

「両袖で口を 塞 いで、風の中を 俯 向いて行く。……その女の案内で、つい向う路地

を入ると、どこも吹附けるから、戸を鎖したが、怪しげな 行 燈 の 煽 っ て見える、ご

たごたした両側の長屋の中に、溝 板 の広い、格子戸造りで、この一軒だけ二階屋。

軒に、御手輕 御 料 理 としたのが、宗山先生の 住 居 だった。

(お客様。)と云う女の送りで、ずつと入る。直ぐその長火鉢を取巻いて、三人ばかり、

変な女が、立膝やら、横坐りやら、猫板に頬杖やら、料理の方は^{ひま}隙らしい。……

あがりかまち ^{とつつ} はしごだん
上 框 の正面が、取 着きの狭い階 子 段 です。

(座敷は二階かい、)と突 然 ^{いきなりほおかむり} 頬 被 を取って上ろうとすると、風立つので ^{あかり} 燈

を置かない。^{まっくら}真 暗 だからちよつと待つて、と色めいてざわつき出す。とその拍子に風

のなぐれで、奴等の上の ^{つりランプ} 釣 洋 燈 がぱつと消えた。

^{なかじきり} 中 仕 切 の障子が、次の室の ^{ま あかり} 燈 にほのめいて、二枚見えた。^{まんなか}真 中

へ、ぱつと映ったのが、大坊主の額の出た、唇の ^{おおき} 大 い影法師。む、宗山め、居る

な、と思うと、憎い事には……影法師の、その背中に ^{つか} 掴 まつて、坊主を揉んでるの ^も

^{きやしや} が華 奢らしい島田 ^{まげ} 髷 で、この影は、濃く映った。

^{マッチ} 火 燵 々々、と女どもが云う内に、

(えへん)と ^{せきばらい} 咳 を太くして、^{おおき} 大 な手で、灰吹を持上げたのが見えて、離れて

^{きせる} 煙 管 が映る。——もう一倍、その時図体が拡がったのは、袖を開いたらしい。此 ^{こいつ} 奴、

^{ね ねこ どてら} 寝ん寝子の広 袖 を着ている。

やつと台洋燈を^つ点けて、

(お待遠でした、さあ、)

つて二階へ。吹矢の店から送って来た女はと、中段からちよつと見ると、両膝をずし

りと、そこに居た奴の^{うしろ}背後へ火鉢を離れて、^{うつむ}俯 向いて坐った。

(あの娘で可いのかな、^{ほか}他 にもござりますよって。)

と六畳の表座敷で低声で言うんだ。——ははあ、商売も大略^{あらまし}分った、と思うと、

そいつ
其奴が

あつらえ
(お誂^{あつらえ}は。)

おおき
と大^{おおき}な声。

(あっさりしたものでちょっと一口。そこで……)

実は……御主人の按摩さんの、咽喉^{のど}が一つ聞きたいのだ、と話した。

(咽喉?)……と其奴がね、異^{おつ}に^{さげす}蔑^{さげす}んだ笑い方をしたものです。

(先生様の……でござりますか、早速そう申しませう。)

てびき えもんづくろ とし
で、地獄の手曳め、急に衣紋繕^{えもんづくろ}いをして下りる。しばらくして上って来た年^{とし}紀

わか はきだめ
の少^{わか}い十六七が、……こりやどうした、よく言う口だが芥溜^{はきだめ}に水仙です、鶴です。

とうちりめん いいわた
帯も襟も唐縮緬^{とうちりめん}じゃあるが、もみじのように美しい。結綿^{いいわた}のふっくりしたのに、

あさぎか しぼだか
浅葱鹿の子の絞高^{あさぎか}な手柄を掛けた。やあ、三人あると云う、妾の一人か。おお

ひざもと
ん神の、お膝許^{ひざもと}で沙汰の限りな！ 宗山坊主の背中を揉んでた島田鬻の影らしい。

なまず ひれ あわれ
惜しや、五十鈴川の星と澄んだその目許も、鯰^{なまず}の鰭^{ひれ}で濁ろう、と可哀^{あわれ}に思う。

ふくさ の
この娘が紫の袱紗^{ふくさ}に載せて、薄茶を持って来たんです。

のど はかま は
いや、御本山の御見識、その咽喉^{のど}を聞きに来たとなると……客にまず袴^{はかま}を穿か

しむけ いきおい ふところ
せる仕向^{しむけ}をするな、真剣勝負面白い。で、こっちも勢^{いきおい}、懐中^{ふところ}から羽織を出し
て着直したんだね。

さかずき きんまきえ
やがて、また持出した、杯^{さかずき}というのが、朱塗に二見ヶ浦を金^{きんまきえ}蒔^{まきえ}絵した、杯

台に構えたのは ^{すご} 凄 かるう。

(まず一ツ上って、こっちへ。)

と按摩の方から、この杯の指図をする。その工合が、謹んで聞け、といった、 ^{すこぶ} 頗

る権高なものさ。どかりとそこへ構え込んだ。その ^{ようす} 容子が膝も腹もずんぐりして、

どうなか ^{のど} のど ^{わき} わき ^{みけん} みけん ^{うね} うね
胴中ほど咽喉が太い。耳の ^傍 傍から眉間へ掛けて、小蛇のように筋が ^敵 敵くる。

眉が薄く、鼻がひしゃげて、ソレその唇の厚い事、おまけに頬骨がギシと出て、 ^か 齒を嚙

むとガチガチと鳴りそう。左の一眼べとりと盲い、右が ^{しろまなこ} 白 ^{かえ} 眼で、ぐるりと ^{かえ} 翻った、

しかも一面、念入の ^{くろあばた} 黒痘瘡だ。

が、争われないのは、 ^{かたわ} 不具者の ^{そうごう} 相格、肩つきばかりは、みじめらしくしょんぼりし

て、猪の熊入道もがっくり投首の ^{ぬきえもん} 抜衣紋で居たんだよ。」

十五

「いえな、何も私が意地悪を言うわけではないえ。」

と湊屋の女中、前垂の膝を堅くして—— ^{かたわら} 傍に柔かな髪 ^{ふっさ} の房りした島田の

^{びん} 鬢を重そうに ^{さしうつむ} 差俯向く……襟足白く冷たそうに、 ^{ときいろ} 水紅色の ^{はぶたえ} 羽二重の、無地の

^{ながじゅばん} 長襦袢の ^{すべ} 肩が ^{なよ} 迂って、寒げに脊筋の抜けるまで、 ^{うちしお} 嬾やかに、打 ^う 悄れた、

残んの嫁菜花の ^{よめな} 薄紫、 ^{あさぎ} 浅葱のように目に淡い、 ^{ちりめん} 藤色縮緬の二枚着で、姿の寂し

^{はたち} い、二十ばかりの若い芸者を ^{しりめ} 流盼に掛けつつ、

「このお座敷は ^{もろ} 貰うて上げるから、なあ ^{あなた} 和女、もうちゃっと内へ ^い お去にや。……島

家の、あの ^{みえ} 三重さんやな、和女、お三重さん、お帰り！」

^{きつ} と屹と言う。

「お前さんがおいでやで、ようお客さんの御機嫌を取ってくれるであろうと、^{こおんな} 小女ば

かり付けておいて、私が勝手へ立違っている ^{うち} 中や、……勿体ない、お客たちの、お

年寄なが気に入らぬか、近頃山田から来た言うて、こちの私の ^{とこ} 許を見くびったか、酌

をせい、と ^{おっしゃ} 仰有っても、^{うきうき} 浮々とした顔はせず…… ^{さみせん} 三味線聞こうとおっしゃれば、

鼻の ^{さき} 頭で笑うたげな。 ^{そば} 傍に居た喜野が見かねて、私の袖を引きに来た。

^{さっき} 先刻から、ああ、こうと、口の酸くなるまで、機嫌を取るようにして、私が和女の調子

を取って、よしこの一つ上方唄でも、どうぞ三味線の ^ね 音をさしておくれ。お客様がお寂

しげな、座敷が浮かぬ、お見やんせ、^{ろうそく} 蠟燭の灯も白けると、頼むようにして聞かい

ても、知らぬ、知らぬ、と言通す。三味線は和女、禁物か。下手や言うて、知らぬ云う

て、^{まがり} 曲なりにもお座つき一つ弾けぬ ^{げいこ} 芸妓がどこにある。

よう、思うてもお見。平の座敷か、そでないか。 ^{あなた} 貴客がたのお人柄を見りや分るに、
何で和女、勤める気や。私が済まぬ。さ、お立ち。ええ、私が箱を下げてやるから。」

と優しいのがツンと立って、^{ふすまぎわ} 襖際 ^つ に横にした三味線を邪陰に取って、衝と

^{たてざま} 縦様に引立てる。

「ああれ。」

はっと ^{もすそ} 裳を摺らして、^{とりすが} 取継るように、女中の膝を ^{そっ} 竊と抱き、袖を引き、三味

線を引留めた。お三重の姿は崩るごとく、芍薬しゃくやくの花の散るに似て、

「堪忍して下さいまし、堪忍して、堪忍して、」と、呼吸いきの切れる声うるが湿うるんで、

「お客様にも、このお内へも、な、何で私が失礼しましょう。ほんとに、あの、ほんとに三味線は出来ませんもの、姉さん、」

ことば
と言ことばが途絶えた。……

「今しがたも、な、他家よそのお座敷、隅の方に坐っていました。不断ではない、兵隊さん

の送別会、大陽気に騒ぐのに、芸のないものは置かん、衣服きものを脱いで踊るんなら

よし いや
可、可厭うちなら下げると……私一人帰されて、主人の家へ戻りますと、直ぐに酷ひどいめに逢いました、え。

三味線も弾けず、踊りも出来ぬ、座敷きもので衣ひっぱ物が脱げないなら、内で脱げ、引剥ひっぱぐ

と、な、帯も何も取られた上、台所で突つつ伏せられて、引窓をわざと開けた、寒いお月

様のさす影で、恥かしいなあ、柄ひしゃく杓ひしゃくで水を立続けて乳へも胸へもかけられましたの。

こちらから、あの、お座敷を掛けて下さいますと、どうでしょう、炬燵こたつであたた温めためた

じゅばん
襦じゅばん袢じゅばんを着せて、東京のお客じゃそうなど、な、取って置きの着物を出して、よう勤めて帰れや言うて、御主人が手で、駒下駄まで出すんです。

勤めるたって、どうしましょう……踊は立あるって歩行くことも出来ませんし、三味線は、それが姉さん、手を当てれば誰にだって、音のせぬ事はないけれど、弾いて聞かせとおっしゃるもの、どうして私唄えます。……

かたわ
不かたわ具なさけでもないに情なさけない。調子が自分で出来ません。何をどうして、お座敷へ置

いて頂けようと思ひますと、気が怯けて気が怯けて、口も満足利けませんから、何が気に入らないで、失礼な顔をすると、お思い遊ばすのも無理はない、なあ。……

このお家へは、お台所で、洗い物のお手伝いをいたします。姉さん、え、姉さん。」

と袖を^{さす}擦って、一生懸命、うるんだ目^{めもと}許を見得もなく、仰^{あおむ}向けになって女中の顔。

……色が見る見る^{やわら}柔いで、突いて立った三味線の^{さお たわ}棹も^{たわ}撓みそうになった、と

見ると、二人の客へ、向直った、ふっくりとある^{あや}綾の帯の^{むすびめ}結目で、なおその女中

の^{たもと おさ}袂を^{おさ}圧えて。……

十六

お三重は、そして、^{あらた ふたり}更めて二箇の老人に手を支いた。

「芸者でお呼び遊ばした、と思ひますと……お役に立たず、^{きま}極りが悪うございまして、

^{ちょうし}お銚子を持ちますにも手が震えてなりません。下^{おさん そば}婢をお^{そば}傍へお置き遊ばしたと

お思いなさいまして、お休みになりますまでお使いなすって下さいまし。お背中を^{たた}敲

きましょう、な、どうぞな、お肩を^も揉まして下さいまし。それなら一生懸命にきつと精を出します。」

^{おしげ}と惜気もなく、前髪を^{ひれふ}畳につくまで平伏した。三指づきの折かがみが、こんな中でも、打上る。

本を開いて、道中の絵をじろじろと黙って見ていた捻平が、重くるしい口を開けて、「子孫末代よい意見じゃ、旅で芸者を呼ぶなぞは、のう、お互に以後謹もう……」と火

箸に手を置く。

まとも りんぷうぼうかしょうろう
所在なさそうに半眼で、正面に臨風榜可小楼を仰ぎながら、程を忘れた
まきたばこ
巻 蓑、この時、口許へ火を吸って、慌てて灰へ ほう 抛 っ て、弥次郎兵衛は一つ咽
せた。

「ええ、いや、女中、……追って祝儀はする。ここでと思うが、その娘が気が 詰 ろうか
ら、どこか小座敷へ休まして みんな 皆 で 饅 飩 だ も 食 べ て くれ。私が おご 驕 る。で、何か面白
い話をして遊ばして、やがて 可い 時 分 に 帰 す が 可い。」と冷くなった ちよこ 猪 口 を 取 っ て、寂
しそうに っ 衝 と 飲 ん だ。

女中は、これよりさき、 っ つ っ た 突 立 っ た その 三 味 線 を、次 の 室 の 暗 い 方 へ 密 と
おしや
押 遣 っ て、が っ っ り と 筋 が 萎 へ た 風 に、折 重 なる まで 摺 寄 り ながら、黙 然 り で、
ともしび
燈 の 影 に 水 の ご と く 打 揺 ぐ、お 三 重 の 背 中 を 擦 っ て いた。

「島屋の亭が、そんな ひどい 事 を し お る か え。可いわ、内の御隠居にそう言うて、沙汰
をして上げよう。心安う思うておいで、ほんにまあ、よう 和 女、顔 へ 疵 も つ け ん
の。」

と、かよわい かいな な だ お
腕 を 撫 下 ろ す。

「ああ、それも売物じゃいうだけの しんしゃく 斟 酌 に 違 い ない な。……お客様に礼言いや。さ、
そして、何かを話しがてら、御隠居の こと 炬 燵 へ お い で。切 下 髪 に 頭 巾 被 っ て、
ちようどな、ようかん
羊 羹 切 っ て、茶を食べてや。
けども、」

とお三重の、その清らかな襟えりもと許から、優しい鬢びんのけ毛さしのぞを差覗くように、

とみこうみ
右瞻左瞻て、

あんた
「和女、因果やな、ほんとに、三味線は弾けぬかい。ペンともシャンとも。」

ほほ
で、わざと慰めるように吻々と笑った。

なさけ
人の情なさけに溶けたと見える……氷る涙の玉を散らして、はっと泣いた声の下で、
「はい、願掛けをしましても、塩断ちまでしましたけれど、どうしても分かりません、調子

うまれつき
が一つ出来ません。性うまれつき来来でござんしょう。」

やみよ しらうめ おもて ろう
師走の闇夜に白梅の、面おもてを蠟ろうに照らされる。

「踊もかい。」

「は……い、」

「泣くな、弱虫、さあ一つ飲まんか！ 元気をつけて。向後どこへか呼ばれた時は、

おび
怯おびえるなよ。気の持ちようでどうにもなる。ジャカジャカと引鳴らせ、糸瓜へちまの皮で搔

こと こきゅう どちらによはち しょう
廻すだ。琴も胡弓ことも用はない。銅鑼こきゅう鑊どちらによはちを叩けさ。簫しょうの笛をパイと遣れ、
上手下手は誰にも分らぬ。それなら芸なしとは言われまい。踊が出来ずば体操だ。

一、」

と左右へ、羽織の紐きの断れるばかり大手を拵かんかつげ、寛かんかつ潤潤な胸を反らすと、

「二よ。」と、庄屋殿が鉄砲二つ、ぬいと前へ突出いて、励ますごとく呵からから々と弥次郎
兵衛、

「これ、その位な事は出来よう。いや、それも度胸だな。見た処、そのように気が弱くて

は、いかな事も遣やっつけられまい、可哀相に。」と声かすが掠掠れる。

「あの……私が、自分から、言います事は出来ません、お^{はずか}恥^{しい}のでございますが、舞の^{まね}真似が少しばかり立てますの、それもただ一ツだけ。」

と云う顔を^{うつむ}俯向いて、恥かしそうにまた手^つを支く。

「舞えるかえ、舞えるのかえ。」

と女中は嬉しそうな声をして、

「おお、踊や言うで明かんのじゃ。舞えるのなら立っておくれ。このお座敷、遠慮は入^いらん。待ちなはれ、地が要ろう。これ喜野、あすこの広間へ行ってな、内の千がそう言うたて、誰でも弾けるのを借りて来やよ。」

とぼんとしていた小女の喜野が立とうとする、と、^{なの}名告ったお千が、打傾いて、優しく口許をちよいと曲げて傾いて、

「待って、待って、」

十七

「いつもと違う。……一度軍隊へ行きなされると、日曜でのうては出られぬ、……お国のためやで、^な馴れぬ苦勞もしなさんす。新兵さんの送別会や。女衆が大勢居ても、一人抜けてもお座敷が寂しくなるもの。

可いわ、旅の恥は搔棄てを^{あべこべ}反^対なが、一泊りのお客さんの前、私が三味線を搔廻そう。お三重さん、立つのは何？ 有るものか、無いものか言うも行過ぎた……有るものどと無いけれど、どうにか間に合わせたいものではある。」

「あら、姉さん。」

と、三味線取りに立とうとした、お千の膝を、袖で^{おさ} 圧 えて、ちとはなじろんだ、お三
重の^{あいきょう} 愛 嬌 。

「糸に合うなら踊ります。あのな、私のはな、お能の舞の真似なんです。」と、言いも果
てず、お千の膝に顔を隠して、小父者^{おじご}と捻平に^{そがい} 背 向 になった初々しさ。包ましやか
な姿ながら、身^もを揉む姿の着崩れして、袖を離れて畳に長い、襦袢の袖は^{なまめ} 媚 かし
い。

「何、その舞を舞うのかい。」と弥次郎兵衛は一言云う。

捻平膝の本をぱったり伏せて、

「さて、飲もう。手酌でよし。ここで舞なぞは願い下げじゃ。せめてお題目の太鼓にさっ
しやい。ふあはははは、」となぜか^{しわが} 皺 枯 れた高笑い、この時ばかり天井に^{どっ} 哄 と響い
た。

「捻平さん、捻さん。」

「おお。」

^{ぶしょう} と不 性 げにやっとな^{こた} 応 える。

「何も道中の話の種じゃ、ちょっと見物をしようと思うね。」

「まず、ご免じゃ。」

「さらば、^{そのもと} 其 許 は^{ねむ} 目を 瞑 るだ。」

「ええ、縁起の悪い事を言わさる。……明日にも江戸へ帰って、可愛い孫娘の顔を見
るまでは、死んでもなかなか目は^{ねむ} 瞑 らぬ。」

「さてさて^{ねじ} 捻 るわ、ソレそこが捻平さね。勝手になされ。さあ、あの^こ 娘 立ったり、この

^{じいさま} 爺 様に遠慮は入らぬぞ。それ、何にも芸がないと云うて肩腰をさすろうと卑下をす

る。どんな真似でも一つ遣れば、立派な芸者の^{めんぼく}面目が立つ。祝儀取るにも心持が
よ
可かろうから、是非見たい。が、しかし心のままにしなよ、決して^{つとめ}勤を強いるじゃな
いぞ。」

「あんなに^{おっしや}仰有って下さるもの。さあ、どんな事するのや知らんが、まずうても大事
ない、大事な、それ、支度は入らぬかい。」

「あい、」

とわずかに身を起すと、紫の襟を^か噛むように——ふっくりしたのが、あわれに^{やつ}窶れ
た——^{おとがい}頤深く、恥かしそうに、^{うちぶところ}内懐を^{のぞ}覗いたが、^{はだみ}膚身に着けたと思
わるる、……胸やや白き^{えもん}衣紋を透かして、濃い紫の細い包、^{ふくさ}袱紗の^{ちりめん}縮緬が
ひらり^{かえ}翻ると、燭台に照って、^{さつ}颯と輝く、銀の地の、ああ、^{しらうお}白魚の指に重そうな、
一本の舞扇。

^{きらり}晃然とあるのを押頂くよう、前髪を掛けて、扇をその、^{ぎよくさん}玉簪のごとく額に当てた
を、そのまま折目高にきりきりと、月の出^{でしお}汐の波の影、^{しずか}静に^{てらてら}照々と開くととも
に、顔を隠して、反らした指のみ、両方親骨にちらりと白い。

また川口の^{しおかげん}汐加減、隣の広間の人^{ひとどよ}動揺めきが^ひ颯と退く。

と見れば^{こうぜん}皎然たる銀の地に、黄金の雲を散らして、^{こんじょう}紺青の月、ただ一輪を
描いたる、扇の影に声澄みて、

「——その時あま人^{もうすよう}申様、もしこのたまを取得たらば、この御子を世継の^{みこ}御位^{みくらい}

になしたまえと^{もうし}申し^{しさい}しかば、子細あらじと領承したもう、さて我子ゆえに捨ん命、露

おし ちひろ
ほども 惜 からじと、千 尋 のなわを腰につけ、もしこの玉をとり得たらば、このなわを
動かすべし、その時人々たちからをそえ——」

しま
と調子が 緊 って、

ひとつ
「……ひきあげたまえと約束し、一 の利剣を抜持って、」

てだれ おのず た
と扇をきりりと袖を直す、と手 練 ぞ見ゆる、自 から、衣紋の位に年長けて、瞳
かんばせ がらす てりそ おもかげ
を定めたその 顔 。硝子戸越に月さして、霜の川浪照添う 俤 。膝

たてす しょくだい
立 据 えた畳にも、燭 台 の花颯と流るる。

「ああ、待てい。」

こも
と捻平、力の 籠 った声を掛けた。

十八

そば
で、火鉢をずっと 傍 へ引いて、

「女中、もちっとこれへ火をおくれ。いや、立つに及ばん。その、鉄瓶をはずせば可
し。」と捻平がいつける。

たちい からだ しま
この場合なり、何となく、お千も起居に身体が 緊 った。

しずか かばん ま
静 に炭火を移させながら、捻平は膝をずらすと、革 靴 などは次の室へ……そ

うなじ
れだけ床の間に差置いた……車の上でも 頸 に掛けた風呂敷包を、重いものよう

やわら よ
に両手で 柔 かに取って、膝の上へ据えながら、お千の顔を除けて、火鉢の上へ
片手を裏表かざしつつ、

「ああ、これ、お三重さんとか言うの、そのお娘、手を上げられい。さ、手を上げて、」

と言う。……お三重は利剣で立とうとしたのを、^{あわただ}慌しく捻平に留められたので、

この時まで、差開いたその舞扇が、唇の花に霞むまで、^{うつむ}俯向いた顔をひたと額につ

けて、片手を^つ畳に支っていた。こう捻平に声懸けられて、わずかに顔を振上げながら、

きりきりと一まず閉じると、その扇を畳むに連れて、今まで、^{かつ}潤と瞳を張って見据え

ていた^{まなこ}眼を、次第に^{ふさ}塞いだ弥次郎兵衛は、ものも言わず、火鉢のふちに、ぶる

ぶると震う指を、と支えた^{なり}態の、^{まきたばこ}巻蓑から、音もしないで、ほろほろと灰がこぼれる。

^{さぶとん}捻平座蒲団を^{ひとひざ}一膝出て、

「いや、^{あらた}更めて、^{とく}熟と、見せてもらおうじゃが、まずこっちへ寄らしゃれ。ええ、今の

^{うたい}謡の、^{かた}気組みと、その形。教えも教えた、さて、習いも習うたの。

こうまでこれを教うるものは、四国の^{はて}果にも^{ほか}他にはあるまい。あらかた人は分っ

たが、それとなく^{たより}音信も聞きたい。の、^{そこ}其許も黙って聞かっしやい。」

と弥次が^{かた}方に、^{めづか}捻平目遣いを一つして、

「まず、どうして、誰から、^{おみ}御身は習うたの。」

「はい、」

と弱々と返事した。お三重はもう、^{たわい}他愛なく娘になって、ほろりとして、

「あの、^{さっき}前刻も申しましたように、不器用も通越した、調子はずれ、その上覚えが悪う

ござんして、長唄の宵や待ちの^{さみせん}三味線のテンもツンも分りません。この間まで^お居りました、山田の新町の姉さんが、朝と昼と、^{てすき}手隙な時は晩方も、日に三度ずつも、あのか
噛んで含めて、胸を割って刻込むように教えて下すったんでございますけれど、自分
でも悲しい。……暁の、とだけ十日かかって、やっと真似だけ弾けますと、夢になって
もう手が違い、心では思いながら、三の手が^{すべ}へ滑って、とぼけたような音^ねがします。

^{ばち}撥^{のど}で咽喉を引裂かれ、^{きせる}煙管で胸を打たれたのも、糸を切った数より多い。

それも何も、邪陰でするのではないのです。……私が、な、まだその前に、^{とば}鳥羽の
^{くるわ}廓に居ました時、……」

「ああ、お前さんは、鳥羽のものかい、志摩だな。」

と弥次郎兵衛がフト聞入れた。

「いえ、私はな、やっぱりお伊勢なんですけれど、^{おとつ}父^なさんが死くなりましてから、
ままはは
^{継母}に売られて行きましたの。はじめに聞いた奉公とは嘘のように違います。

——お客の言うことを聞かぬ言うて、^{おか}陸^{がけ}で悪くば海で稼げって、^{がけ}岨^の下の

^{ふなつき}船着^{つかま}から、夜になると、男衆に^{つかま}捉えられて、小船に積まれて海へ出て、月が
あっても、島の蔭の暗い処を、危いなあ、ひやひやする、木の葉のように浮いて^{ある}歩行
いて、^{しん}寂とした海の上で……悲しい唄を唄います。そしてお客の取れぬ時は、船頭

衆の胸に響いて、女が恋しゅうなる^{まじない}禁厭^{ちゃひ}じゃ、お茶^{ちゃひ}挽いた罰、と云って、船から海

へ、びしゃびしゃと追下ろして、^{しお}汐^{いわ}の干た^{いわ}巖^{うつむ}へ上げて、巖の裂目へ^{うつむ}俯向けに口を

つけさして、(こいし、こいし。)と呼ばせます。若い衆は^{へさき}舳^{へさき}に待ってて、声が切れる

と、^{さざえ}榮螺の殻をぴしぴしと^{ぶつつ}打着けますの。汐風が濡れて吹く、夏の夜でも寒いもの。

……私のそれは、師走から、寒の^{うち}中で、八百八^{やしま}島あると言う、どの島も皆白い。霜風が凍りついた、巖の角は針のような、あの、その上で、(こいし、こいし。)って、唇の、

しびれるばかり泣いている。咽喉は^{のど}裂け、舌は凍って、^{しお}潮を浴びた^{すそ}裾から冷え通

って、正体がなくなる処を、^{ひっか}貝殻で引搔かれて、やっと船で正気が付くのは、^{あかり}灯

もない、何の船やら、あの、まあ、鬼の^つ支いた棒見るような帆柱の下から、皮の^{こわ}硬い

^{おおき}大な手が出て、^{ひつつか}引搦んで抱込みます。

空には^{あお}蒼い星ばかり、海の水は皆黒い。^{やみ}暗の夜の血の池に落ちたようで、ああ、生きてるか……千鳥も鳴く、私も泣く。……お恥かしゅうござんす。」

^{かざ}と翳す扇の利剣に添えて、水のような袖をあて、顔を隠したその風情。人は声なく

して、ただ、ちりちりと、^{ろうそく}蠟燭の^{なんだ}涙白く散る。

この物語を聞く人々、いかに日和山の頂より、志摩の島々、海^{なぎ}の^{なぎ}風、霞の池に鶴

の舞う、あの、^{うららか}麗朗なる景色を見たるか。

十九

「泣いてばかりいますから、気の荒いお船頭が、こんな泣虫を買うほどなら、伊良子崎

^{なまこ}海鼠を^{ふとん}蒲団で、^{やしま}弥島の^{いか}烏賊を遊ぶって、どの船からも投出される。

また、あの^{いわ}巖に追上げられて、霜風の^{あいあい}間々に、(こいし、こいし。)と泣くのでござんす。

手足は凍って貝になっても、(こいし)と泣くのが本望な。巖の裂目を沖へ通って、海
はて ^い まで響いて欲しい。もう船も去ね、潮も来い。……そのままで石になってしま
たいと思うほど、お客様、私は、あの、」

と乱れた襦袢の袖を ^{くわ} 銜えた、水 ^{ときいろ} 紅色映る ^{まぶた} 瞼のあたり、ほんのりと薄くして、
「心でばかり長い事、思っております人があって。……芸も ^{きりょう} 容色もないものが、生
意気を云うようですが、……たとい殺されても、死んでもと、心願掛けておりました。

ある晩も、やっぱり ^{あお} 蒼い灯の船に買われて、その船頭衆の言う事 ^き を肯かなかった
ので、こっちの船へ突返されると、^{とも} 艫の処 ^{あんか} に行 ^{また} 火を跨いで、どぶろくを飲んでい
た、私を送りの若い衆 ^{しゅ} がな、^{ぎよくだい} 玉代 ^{こなたしゅう} だけ損をしやはれ、此方衆 ^き の見る前で、
この女を、^{あま} 海士にして慰もうと、月の良い晩でした。

胴の間で着物を脱がして、^{はだ} 膚の紐へなわを付けて、^{さかさま} 倒に海の深みへ沈めま
す。ずんずんずんと沈んでな、もう奈落かと思う時、^{つるべ} 釣瓶のようにきりきりと、^{からだ} 身体
を車に引上げて、^{しづく} 髪 ^{つっこ} の雫も切らせずに、また海へ突込みました。

この時な、その ^{かか} 繋り船に、長崎辺の伯父が一人乗込んでいると云うて、お
^{こづかい} 小遣の無心に来て、泊込んでおりました、二見から鳥羽がよいの馬車に、
^{ぎよしゃ} 駈者をします、寒中、^{しゃつ} 襦袢一枚に ^{ずぼん} 袴服 ^は を穿いた若い人が、私のそんなにされる
のが、あんまり可哀相な、とそう云うて、伊勢へ帰って、その話をしましたので、今、あ
の申しました。……

この間までおりました、古市の ^{しんまち} 新地 ^{かね} の姉さんが、随分なお金子を出して、私を連

れ出してくれましたの。

それでな、鳥羽の鬼へも ^{つらあて}面 当 に、芸をよく覚えて、立派な芸子になれやッて、姉
さんが、そうやッて、目に涙を一杯ためて、ぴしぴし ^{ばち ぶ}撥 で打ちながら、三味線を教え
てくれるんですが、どうした因果か、ちっとも覚えられません。

人さしと、中指と、ちょっとの間を、一日に三度ずつ、一週間も鳴らしますから、近所
隣も迷惑して、御飯もまずいと言うのですえ。

また月の良い晩でした。ああ、今の御主人が、親切なだけなお辛い。……何の、
^{からだ}身体 の切ない、^{いのち}苦しいだけは、生 命 が絶えればそれで済む。いつそまた鳥羽へ行
つて、あの ^{いわ つか}巖 に 掴 まって、(こいし、こいし、)と泣こうか知らぬ、膚の紐になわつけ
て、海へ入れられるが気安いような、と島も海も目に見えて、ふらふらと月の中を、千
^{めいど}鳥が、冥 土 の使いに来て、連れて行かれそうに思いました。……^{さき}格子 前 へ流しが
来ました。

新町の月影に、露の垂りそうな、あの、ちらちら光る ^{ばちおと}撥 音 で、
……博多帯しめ、筑前絞り——

と、^い何とも言えぬ好い声で。

(へい、不調法、お ^{やかま}喧 ^ゆしゅう、)ッて、そのまま行きそうにしたのです。

(ああ、^{みぶるい}身 震 がするほど^{うま}上手い、あやかるように^{さいせん}拝んで来な、それ、お 賽 銭 を
あげる気で。)

^{たきじま めし はんてん}と滝 縞お召 の半 纏 着て、灰に袖のつくほどに、しんみり聞いてやった姉さ
んが、^{ひきだし}長火鉢の 抽 斗 からお宝を出して、^{しゅす}キイと、あの 繻 子が鳴る、^{はさ}帯へ 挿 んだ

懐紙に^{ひね}捻って、私に持たせなすったのを、盆に乗せて、戸を開けると、もう一二^{けん}間
行きなさいます。二人の間にある月をな、影で^{つな}繋いで、ちゃつと行って、
^{こいし}(是喃。)と呼んで、出した盆を、振向いてお取りでした。私や、思わずその手に^{すが}縫
って、涙がひとりでにしましたえ。男で居ながら、こんなにも上手な方があるものを、
^せ切めてその指一本でも、私の^{からだ}身体についたらばと、つい、おろおろと泣いたのです。
^{ほおかむり}頬被をしていなすった。あのその、私の手を取ったまま——黙って、少し脇の
^の方へ退いた処で、(何を泣く、)って優しい声で、その門附が聞いてくれます。もう恥も
何も忘れてな、その、あの、どうしても三味線の覚えられぬ事を話しました。」

二十

「よく聞いて、しばらく^{じっ}熟と顔を見ていなさいました。
^{がんがけ}(芸事の出来るように、神へ願懸をすると云って、夜の明けぬ内、外へ出ろ。鼓ヶ
嶽の裾にある、雑樹林の中へ来い。三日とも思うけれど、主人には、七日と頼んで。
すぐ、今夜の明方から。……分ったか。若い女の途中が^{あぶな}危い、この入口まで来て
待ってやる、^{ばか}化されると思うな、夢ではない。……)
とお言いのなり、三味線を胸に^{くっ}附着けて、フィと暗がりへ附着いて、黒塀を去きなさい
ます。……
その事は言わぬけれど、明方の三時から、夜の白むまで^{こり}垢離取って、願懸けすると
頼んだら、姉さんは、喜んで、承知してくれました。

殺されたら死ぬ気でな、——大恩のある御主人の、この格子戸も見納めか、と思う

ようで、軒下へ出て振返って、門を^{かど}視^{なが}めて、立っていると。

(おいで、)

と云って、突^{いきなり}然^{うしろ}、背後から手を取りなすった、門附のそのお方。

私はな、よう覚悟はしていたが、天狗様に^{さら}攫^{られるか}と思いましたが。

あとは夢やら^{うつ}現^{やら}。明方内へ帰ってからも、その^{あと}後^は二日も三日もただ^{ぼう}茫

としておりましたの。……鼓ヶ嶽の松風と、五十鈴川の^{ながれ}流^の音と聞えます、雑木の森の暗い中で、その方に教わりました。……舞も、あの、さす手も、ひく手も、ただ^{うしろ}背後^{から}背中を抱いて下さいますと、私の^{からだ}身体^が、舞いました。それだけより存じません。

もっとも、私が、あの、鳥羽の海へ投入られた、その身の上も話しました。その方

は不思議な事で、私とは^{かたき}敵^{のような}中だ事も、いろいろ入組んではおりますけれど、鼓ヶ嶽の裾の話は、誰にも言うな、と口留めをされました。何んにも話がなりません。

五日目に、もう可いから、これを舞って座敷をせい。芸なし、とは言うまい、って、お

^{かたみ}記^念なり、しるしなりに、この舞扇を下さいました。」

と袖で胸へしっかりと抱いて、ぶるぶると肩を震わした、^{おくれげ}後^毛がはらりとなる。

^{ためいき}捻^{うなず}平溜^息をして^頷き、

「いや、よく分った。教え方も、習い方も、話されずとよく分った。時に、山田に居て、どうじゃな、その舞だけでは勤まらなんだか。」

「はい、はじめて謡いました時は、^{うた}皆^{みんな}が、わっと笑うやら、中には^{おそろし}恐^{こわ}い怖
いと云う人もござんす。なぜ言うと、五日ばかり、あの私がな、天狗様に誘い出された、
^{うわさ}と風説したのでござんすから。」

「は、いかにも師匠が魔でなくては、その立方は習われぬわ。むむ、で、何かの、伊勢
^{うたい}にも謡うたうものの、五人七人はあろうと思うが、その連中には見せなんだか。」

「ええ、^{ものずき}物好に試すって、呼んだ方もありましたが、地をお謡いなさる方が、何じゃ
やら、ちっとも、ものにならぬと言って、^やすぐにお留めなさいましたの。」

「ははあ、いや、その足拍子を入れられては、^{うたい}やわな謡^{ちぎ}は断れて飛ぶじゃよ。は
はははは、^{うな}唸^{こっぱい}る連中粉灰じゃて。かたがたこの桑名へ、住替えとやらしたのか
の。」

「狐狸や、いや、あの、^ほ吠えて飛ぶ処は、^{ふくろ}梟^{つきもの}の憑物^{きちがい}がしよった、と皆氣違に
しなさいます。姉さんも、手放すのは可哀相や言って下さいましたけれど、……^{まわり}周囲
の人が承知しませず、……この桑名の島屋とは、^{ゆき}行^{かい}いはせぬ遠い中でも、姉さん
の縁続きでござんすから、^{よこ}預けるつもりで寄越されましたの。」

「おお、そこで、また辛い^{おもい}思^{おも}をさせられるか。まずまず、それは後でゆっくり聞こう。
……そのお娘、私も同^こ一^{わし}じゃ。天魔でなくて、若い女が、^{わざ}術^{わざ}をするわと、仰天し
たので、手を留めて済まなんだ。さあ、立直して舞うて下さい。大儀じゃろうが一さし頼
^{わし}む。私も^{ひさし}久^{なつか}ぶりで可懐しい、御身^{おんみ}の姿で、若師匠の御意を得よう。」

^{ことば}と^{うち}言^{えが}の中に、膝で解く、その風呂敷の中を見よ。土佐の名手が画いたような、

あか しらべ たつたがわ きぬた
紅い 調 は立田川、月の裏皮、表皮。玉の 砧 を、打つや、うつつに、天人
も聞けかして、雲井、と 銘 ある秘蔵の 塗 胴。老 の手 捌き美しく、錦 に梭
を、投ぐるよう、さらさらと緒を 緊めて、火鉢の火に高く 翳 す、と……呼吸をのんで驚
いたように見ていたお干は、思わず、はっと両手を 支いた。

芸の威厳は争われず、この捻平を誰とかする、七十八歳の おきな 翁、辺見秀之進。近
頃孫に代を譲って、雪 叟 とて隠居した、小鼓取って、本朝無双の名人である。

いざや、おじご 小父者は能役者、当流第一の老手、恩地源三郎、すなわちこれ。

この二人は、こうしゃく かみ やかた
この二人は、侯 爵 津の 守 が、参宮の、仮の 館 に催された、一調の番組を
勤め済まして、あとを膝栗毛で帰る途中であった。

二十一

うどんや あにい
さて、饅 飩屋では門附の 兄 哥 が語り次ぐ。

「いや、それから、いろいろ勿体つける所作があつて、やがて大坊主が うたいだ 謡 出した。

聞くと、どうして、思ったより出来ている、按摩 鍼 の芸ではない。…… 戸 外をどッ

どと吹く風の中へ、この声を 打 撒 けたら、あのパイパイ笛ぐらいに 纏 まろうというも

んです。成程、随分 なかま こいつ 夥 間には、此 奴 に(的等。)扱いにされようというのが少くない。

が、私に取っちゃ しょうてき 小 敵 だった。けれども芸は大事です、あなど 侮 るまい、と気を 緊
めて、そこで、膝を。」

すわりなお
と坐直ると、肩の按摩が上へ浮いて、門附の衣紋が緊る。^{えもん しま}

「……この膝を^{ちょう}丁と叩いて、黙ってニツ三ツ拍子を取ると、この拍子が^{ただ}尋常んじゃない。……親なり師匠の叔父きの膝に、^{こども}小児の時から、抱かれて習った相伝だ。

あいて
相手の節の隙間を切って、伸^{のびちぢ}縮^しみを緊めつ、緩めつ、声の重味を^{はねあ}芻上げて、

のど
咽喉の呼吸を突崩す。寸法を知らず、間拍子の分らない、まんざらの素人は、

めくらつんぼ
盲目^{あいて}聾で気にはしないが、ちと商売人の端くれで、いささか心得のある相手だ

と、トンと一つ打たれただけで、もう声^{ひっかか}が引掛って、節が^{ぶざま}不状に蹴^{けつまず}躓く。三味

線の^{あい おんなじ}間も同一だ。どうです、意気なお方に釣合わぬ……ン、と^は一ツ芻ねないと、

野暮な矢の字が、とうふにかすがい、^{ぬか}糠に釘でぐしゃりとならあね。

さすがに心得のある奴だけ、商売人にぴたりと一ツ、拍子で声^{おっふ}を押伏せられると、

張った調子が直ぐにたるんだ。思えば余計な若氣の^{あやまち}過失、こっちは畜生の^{あさま}浅猿

しさだが、^{あいて}相手は素人の悲しさだ。

あわれや宗山。見る内に、額にたらたらと衝と汗を流し、死^{しにごえ}声を振絞ると、^{あご}頤

から胸へ^{あぶら}膏を絞った……あのその大きな唇が^{なまこ}海鼠を干したように乾いて来て、

舌が^{こわ}硬^{いき}って呼吸が^{はず}発奮む。わなわなと震える手で、^{つか}畳を掴むように、うたいながら

ちょこ
猪口を拾おうとする処、ものの本をまだ一枚とうたわぬ^{さき}前、ピシリとそこへ高拍子を

打込んだのが、^{したつぱら}下腹へ響いて、ドン底から節が抜けたものらしい。

はっと火のような呼吸を吐く、トタンに^{いき}真俯^{まうつむ}向けに突^{つつ}伏す時、長々と舌を吐いて、

犬のように畳を^な管めた。

(先生、御病気か。)

って私あ^{にっこり}莞爾したんだ。

(是非聞きたい、平にどうか。宗山、この上に^{つんぼ}龕になっても、^{あなた}貴下のを一番、聞かずには死なれぬ。)

^{こぶし}と拳を握って、せいせい言ってる。

(按摩さん。)

と私は呼んで、

(尾上町の藤屋まで、どのくらい離れている。)

(何んで、)

と聞く。

(間によっては声が響く。内証で来たんだ。……藤屋には私の声が聞かしたくない、叔

父が一人寝てござるんだ。勇士は霜の^{けはい}氣勢を知るとさ——たださえ^{めざと}目敏い

としより^{としより}老人が、この風だから寝苦しがつて、フト起きてでもいるとならない、祝儀は置いた。

帰るぜ。)

ト宗山が、^{じっ}凝と^{ふさ}塞いだ目を、ぐるぐると動かして、

^{しばら}(暫く、今の拍子を打ちなされ……古市から尾上町まで声が聞えようか、と言いな

される、御大言、年のお^{わか}少さ。まだ一^{ひとたび}度も声は聞かず、顔はもとより見た事もなければ……当流の大師匠、恩地源三郎どの養子と聞く……同じ喜多八氏の外にはあるまい。さようござろう、恩地、)

と私の名をちゃんと言う。

ああ、酔った、」

と杯をばたりと落した。

しゃべ
「饒舌って悪い私の名じゃない。叔父に済まない。二人とも、誰にも言うな。……」

おうよう
と鷹揚で、按摩と女房に目をあしらい。

「私は羽織の裾を払って、

(違ったような、当たったようだ、が、何しろ、東京の的等の一人だ。宗家の宗、本山の

山、宗山か。若^{わかめ}布^はの附焼でも土産に持って、東海道を這い上れ。恩地の台所から

おとず
音^{こま}信れたら、叔父には内証で、居候の腕白が、独楽を廻す片手間に、この浦船でも
教えてやろう。)

とずっと立つ。

二十二

あばた^{しろまなこ} しろまなこ^む 白^{いきどお}眼^むを剥いて、よたよたと立上って、憤^いった声ながら、

なつかし
(可^な懐^かいわ、若旦那、盲人の悲しさ顔は見えぬ。触らせて下され、つかまらせて下

され、一^{ひと}撫^なで、撫^なでさせて下され。)

と言う。

いや、撫^{たま}られて堪^{たま}りますか。

すりぬ^{めくら} 摺^{うち}抜けようとするんだがね、六畳の狭い座敷、盲目でも自分の家だ。

素早く、階^{はしご}子^{だん}段^{ふさ}の降口を塞いで、むずと、大手を拵けたろう。……影が天井へ

かか いっぱい あせあぶら
懸って、充満の黒坊主が、汗膏を流して撫じようとする。

しつとしゅうぢやく
いや、その嫉妬執着の、陰な不思議の形相が、今もって忘れられない。

いや
(可厭だ、可厭だ、可厭だ。)と、こっちは夢中に出ようとする、よける、留める、行違う

で、やわな、かぐら堂の二階中みしみしと鳴る。風は轟々と当る。ただ黒雲に捲か

れたようで、おそろ すご
可恐しくなった、凄さは凄し。

つ ひっくぐ か
衝と、引潜って、ドンと飛び摺りに、どどどと駈け下りると、ね。

そで
(袖や、止めませい。)

わめ しわがれごえ
と宗山が二階で喚いた。皺枯声が、風でぱっと耳に当ると、三四人立騒ぐ

女の中から、ずっと美しく姿を抜いて、格子を開けた門口で、しっかり掴まる。吹

も さっ あか つま から すが ゆいわた
きつけて揉む風で、颯と紅い褙が搦むように、私に縫ったのが、結綿の、

その娘です。

めかけ
背中を揉んでた、薄茶を出した、あの影法師の妾だろう。

すずし はり
ものを言う清い、張のある目を上から見込んで、構うものか、行きがけだ。

おもちゃ
(可愛い人だな、おい、殺されても死んでも、人の玩弄物にされるな。)

つっぱな
と言捨てに突放す。

しゃじん
(あれ。)と云う声がうしろへ、ぱっと吹飛ばされる風に向って、砂塵の中へ、や、躍

か
込むようにして一散に駈けて返った。

のち
後に知った、が、妾じゃない。お袖と云うその可愛いのは、宗山の娘だったね。そ

れを娘と知っていたら、いや、その時だって気が付いたら、按摩が親の仇敵^{かたき}でも、

わっし
私 あ退治るんじゃなかったんだ。」

と不意にがっくりと胸を折って俯向くと、按摩の手が、肩を^{うつむ} 通^{すべ}って、ぬいと越す。

……その袖の陰で、取るともなく、落した杯を探りながら、

「もしか、按摩が尋ねて来たら、堅く居らん、と言え、と宿のものへ^お 吩^{いいつ} 附けた。叔父の

すやすやは、上首尾で、並べて取った床の中へ、すっぽり入って、^{ひっかぶ} 引^{いい} 被^いって、可
心持に寝たんだが。

ああ、寝心の^い 好い^い 思いをしたのは、その晩きりさ。

なぜって、宗山がその夜の^{うち} 中^{はずかし} に、私に^{くや} 辱^め られたのを口惜しがって、

ごうまん
傲慢な奴だけに、ぴしりと、もろい折方、憤死してしまったんだ。七代まで流儀に

たた
崇^{がき} る、と手探りでにじり書^{かきおき} した遺^い 書^き を残してな。死んだのは鼓ヶ嶽の裾だった。

あの^{ひろっぱ} 広^{さが} 場の^よ 雑樹^{こやみ} へ下^こ っ^{やみ} て、夜が明けて、やっ^こ と小^{やみ} 止^こ になった風に、ふらふらと
まだ動いていたとさ。

こっちは何にも知らなかりう、風は^な 凪^{よし} ぐ、天気は^{よし} 可^{よし} 。叔父は一段の上機嫌。……古

市を立て二見へ行った。朝の^{うち} 中^{うち} 、朝日館と云うのへ入って、いずれ泊る、……先

へ鳥羽へ行って、ゆっくりしようと、直ぐに車で、上の山から、日の出の下、二見の浦

の上を^{さじき} 通^{あおだたみ} って、日和山を^{あおだたみ} 棧^{あおだたみ} 敷^{あおだたみ} に、山の上に、海を^{あおだたみ} 青^{あおだたみ} 畳^{あおだたみ} にして二人で半日。やが
て朝日館へ帰る、……とどうだ。

はたご
旅籠の表は黒山の人ばかりで、内の廊下もごった返す。大袈裟^{おおげさ} な事を言うんじ

やない。伊勢から私たちに逢いに来たのだ。按摩の変事と遺書とで、その日の内に国中へ知れ渡った。別にその事について文句は申さぬ。芸事で宗山の留を刺したほどの豪い方々、是非に一日、山田で謡が聞かして欲しい、と羽織袴、フロックで押寄せたろう。

いや、叔父が怒るまいか。日本一の不所存もの、恩地源三郎が申渡す、向後いっせつ一切、謡を口にすること罷成らん。立ち処に勘当だ。さて宗山とか云う盲人、己が不束なを知って屈死した心、かくのごときは芸の上のおにがみ鬼神なれば、自分は、葬式の送りむかい、墓に謡を手向きよう、と人々と約束して、私はその場から追出された。

あとの事は何も知らず、その時から、津々浦々をさすらいある歩行く、門附の果敢い身の上。」

二十三

「名古屋の大須の観音の裏町で、これも浮世に別れたらしい、三味線一挺、古道具屋の店にあったを工面したのがはじまりで、一銭二銭、三銭じゃ木賃で泊めぬ夜も多し、日数をつもると野宿も半分、京大阪と経めぐって、西は博多まで行ったっけ。何んだか伊勢が気になって、妙に急いで、逆戻りにまた来た。……

私が言ったただ一言、(人のおもちゃになるな。)と言ったを、生命がけで守っている。……可愛い娘に逢ったのが一生のおもいで思出だ。

どうなるものでもないんだから、早く影をくらましたが、四日市で煩って、女房さん。」

と呼びかけた。

「お前さんじゃないけれど、深切な人があった。やっと足腰が立ったと思いいねえ。上方

筋は何でもない、間違ったて謡を聞いても、お百姓が、(風呂が沸いた)で竹法螺吹く

も同然だが、東へ上あずままって、箱根の山のどてっばらへ手が掛かると、もう、な、江戸の鼓が響くから、どう我慢がなるものか！ うっかり謡をうたいそううで危あくまってならない

からね、今切いまぎれぎは越おせおせいません。これから大泉原おおいいずみみはらいなべあげき

大垣街道。岐阜へ出たら飛驒越ひだごええほっこくで、北国筋へも廻ろうかしら、と富田近所を三日

稼いで、桑名へ来たのが昨日きのうだった。

その今夜はどうだ。不思議な人を二人見て、遣切れなくなってこの家へ飛込んだ。

ながしからだささが、流の笛が身体に刺る。いつもよりはなお激しい。そこへまた影を見た。美し

い影も見れば、可おそろろしい影も見た。ここで按摩が殺す気だろう。構うもんか、勝手に

しろ、似たものを引ひきつけて、とそう覚悟して按摩さん、背中へ掴つかままってもらったんだ。

が、筋を抜かれる、身をられる、私が五体は裂けるようだ。」

とまた差さしうつむむ俯うむむ向むく肩を越して、按摩の手が、それも物に震えながら、はたはたと

おのの戦しがしがつらくつつあわせああわせああながら、背中に獅噛んだ面の附着く……門附の袷あの褪あせた色は、

はだうすはだうすどうきどうきつちぐもも膚は薄うな胸を透かして、動悸が筋に映るよう、あわれ、博多の柳の姿に、土蜘蛛

一つかららみついたようにすごご凄あく見える。

「誰や！」

と、不意に吃^{びっくり}驚したような女房の声、うしろ見られる神棚の^{ともし}灯も暗くなる端に、
べろべろと紙が濡れて、^{かど}門の腰障子に穴があいた。それを見^{みとが}咎めて一つ^{わめ}喚く、
とがたがたと、^{あしおと}躑^か音^の高く、駈け退いたのは御亭どの。

いや、困った親^{おやじ}仁が、一人でない、薪^{まきざっぼう}雜^{ぼうちぎ}棒、棒千切れで、二人ばかり、若い
ものを連れていた。

「御老体、」

雪叟が小鼓^しを緊めたのを見て……こう言って、恩地源三郎が^{げんぜん}儼然として顧みて、
「破格のお附合い、^{おそれ}恐^{おそれ}多いな。」

と膝に扇を取って会釈をする。

「相変らず未熟でござる。」

と雪叟が礼を返して、そのまま座を下へおりんとした。

「平に、それは。」

「いや、蒲団の上では、お流儀に失礼じゃ。」

「は、その娘の舞が、^こ甥^{おい}の奴の^{おもかげ}倅^{ゆえ}ゆえに、遠慮した、では私も、」

と言った時、左右へ、^{ひと}敷物を^は齊しく^は刎ねた。

「嫁女、嫁女、」

と源三郎、二声呼んで、

「お三重さんか、私は嫁と思うぞ。喜多八の叔父源三郎じゃ、^{あらた}更^{あらた}めて一さし舞え。」

二人の名家が^{きつ}屹^{きつ}と居直る。

瞳の動かぬ気高い顔して、^{うっとり}恍惚と見詰めながら、よろよると^{ひきさが}引退る、と黒髪う

つる藤紫、肩も^{かいな}腕も^{なよやか}嬌娜ながら、袖に構えた扇の利剣、霜夜に声も^{りんりん}凜々と、
「……上げたまえと約束し、一つの利剣を抜持って……」

肩に^{あや}綾なす鼓の手影、雲井の胴に^{つや}光さし、^こ艶が添って、^こ名誉が籠めた心の花に、
^{しらべ}調の緒の色、^{さっ}颯と燃え、ヤオ、と一つ^{かか}声が懸る。

「あっ、」

とばかり、^{きつ}屹と見据えた——能楽界の鶴なりしを、雲隠れつ、と^{おし}惜まれた——恩
地喜多八、^{しょうぎ}饅頭屋の床^つ几から、衝と片足を土間に落して、

「雪叟が鼓を打つ！ 鼓を打つ！」と身を揉んだ、胸を切めて、^{あわただ}慌しく取って

^{おお}蔽うた、手拭に、かつと血を吐いたが、かなぐり棄てると、^{めて}右手を^{つか}掴んで、按摩の
手をしつかと取った。

^{たた}「崇らば、崇れ、さあ、按摩。湊屋の^{かど}門まで来い。もう一度、若旦那が聞かしてや
ろう。」

^{ひった}と、引立てて、ずいと出た。

「(源三郎)……かくて竜宮に至りて宮中を見れば、その高さ三十丈の玉塔に、かの玉を

^{おき}こめ^{こうげ}置、香花を備え、守護神は八竜^{なみい}並居たり、その外^{わに}悪魚^{のが}鰐の口、遁れが
^{わが}たしや^{ふるさと}我命、さすが恩愛の故郷のかたぞ恋しき、あの浪のあなたにぞ……」

その時、^{みなぎ}漲る心の^{はり}張に、島田の^{もとゆい}元結ふつつと切れ、肩に崩るる緑の黒髪。

水に乱れて、^{ゆら}灯に揺めき、^{もすそ}暈の海は^{ちり}裳に澄んで、^{とど}塵も^{まいぶり}留めぬ舞振かな。

「(源三郎)……わがこ あ
我 子 は有らん、父大臣もおわすらむ……」

と声が 幽 かす んで、源三郎の地謡う節が、フ途絶えようとした時であった。

この湊屋の門口で、さわやか
爽 に調子を合わせた。……その声、白き 虹 にじ のごとく、衝
つ
と来て、お三重の姿に射した。

「(喜多八)……さるにてもこのままに別れ 果 はて
なんかなしさよと、涙ぐみて立ちしが
……」

「やあ、大事な処、倒れるな。」

と源三郎すつと座を立ち、よろめく三重の 背 せな を支えた、老 の 腕 おい かいな めなみ
に女浪の袖、
この後見の大磐石に、みるの緑の黒髪かけて、さっ かざ
颯と翳すや舞扇は、銀地に、その、
雲も恋人の影も立添う、光を放って、ともしび しら
灯 を白めて舞うのである。

舞いも舞うた、謡いも謡う。はた雪叟が自得の秘曲に、桑名の海も、トと おおかわ
大 鼓
の拍子を添え、川浪近くタタと鳴って、太鼓の ひびき みぎわ
響 に 汀 たどさん
を打てば、多度山の霜
の頂、月の御在所ヶ 嶽 たけ の影、鎌ヶ嶽、かむり
冠 け嶽も冠着て、客座に並ぶ けはい
気 勢 あり。
さよ
小夜更けぬ。町凍てぬ。どこともしもなく 虚 おおぞら
空 に笛の聞えた時、恩地喜多八はただ
一人、湊屋の軒の蔭に、姿 あお
蒼 しく、影を濃く立って謡うと、月が棟高く ひさし
廂 を照らして、
かれ おもて
渠 の 面 に、扇のような光を投げた。舞の扇と、うら表に、そこでぴたりと合うので
ある。

「(喜多八)……また思切って手を合せ、^{なむ}南無^{しどじ}や志渡寺の^{さつた}観音^薩の力をあわせてた
びたまえとて、大悲の利剣を額にあて、竜宮に飛び入れば、左右へは^のとぞ退いたり
ける、」

と謡い澄ましつつ、

「^{せな}背^を貸せ、宗山。」と言うとともに、恩地喜多八は^{さま}疲れた^{さつき}状して、先刻からその
裾に、大きく何やら^{うづく}踞^{まった}、形のない、ものの影を、腰掛くるよう、^{ひっし}取って引^{敷く}
がごとくにした。

路一筋白くして、^{かけあんどん}掛^行燈^のの更けたかなたこなた、^つ杖を支いた按摩も交って、ち
らちらと人立ちする。

明治四十三(一九一〇)年一月

底本：「泉鏡花集成 6」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成 8）年 3 月 21 日第 1 刷発行

底本の親本：「鏡花全集」岩波書店

1942（昭和 17）年 7 月刊行開始

※底本で句点が抜けている箇所は親本を参照して補いました。

※誤植を疑った箇所はちくま日本文学全集を参照しました。

入力：門田裕志

校正：砂場清隆

2002 年 1 月 9 日公開

2005 年 9 月 25 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、[青空文庫 \(http://www.aozora.gr.jp/\)](http://www.aozora.gr.jp/)

で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。